

重信の年中行事



は じ め に

すばらしい自然と香り高い文化に恵まれた重信町は、愛媛県のほぼ中央に位置し、古い歴史を持ち文化財や伝統的な文化が数多く残されています。本町は、かつて純農村地帯でありましたが、近年は人口が増加し都市化の様相を深めてまいりました。それに、高度経済成長により80%以上の方々が中流意識をもって暮らすようになりました。

このように、社会の急激な変化につれて、毎日の暮らしの中で豊かな物質文明を追い続け、ややもすると精神的な豊かさの大切さが忘れられようとしています。ここに「心の教育」が重視されてきたわけがあります。

そこで、私たちは、今まで以上に古い歴史を持つ郷土を知り、四季おりおりの行事を継承してきた先人の愛郷心をしのび、その心を受け継ぐことが極めて大切であります。これが、ひいては私の提唱する「うるおいと活力のある町づくり」にも通じるものと確信いたします。

かかる意味から、この度、町内に古くから継承されてきた年中行事を一冊の本にまとめ、発刊する運びとなりましたことは誠に意義深いものと存じます。

編集されている行事の一つ一つに先人の遺徳がしのばれ、ふるさとづくりに向けて精進してこられたたくましさの心ぬくもりが感じられます。この機会に、更に町民各位が愛郷心を結集されて、重信町の発展に御活躍されますことを祈ってやみません。

終わりに、この本を発行するにあたり、御執筆いただいた方をはじめ、多くの諸氏に深い敬意と感謝の意を表し、心から厚く御礼申し上げます。

昭和63年11月3日

重信町長 東 村 旭

発刊のことば

国には国の歴史や文化があるように、県や市町村にもそれぞれ独自の顔を持った歴史や文化があります。

わが重信町におきましても、「大河の流域に国興り文化が栄える」という言葉のとおり、重信川に沿い古くから生活圏が確立され、縄文時代からの長い歴史と、その時代時代に即した文化の大輪が咲き、今では政治、経済、教育文化等あらゆる面で県下の雄町となっておりますことは、誠に御同慶に堪えません。

こういう長い歴史の中で、私たちの先人は、儀式上や生活上等の見地から各種行事を生み、それを守ってまいりました。

その中には時代とともに消滅したもの、現在も続いているもの、一時なくなっていたが今は復活しているもの等々がありますが、この度、これらを取り上げ、「重信の年中行事」として本誌を発刊することになりました。

現在の教育をふまえ21世紀に生きる子どもたちにかなる教育が必要かを審議した臨時教育審議会、その答申を受けて具体的な内容を審議する教育課程審議会等では、今後の重点課題の一つとして、自国の伝統文化を正しく理解し、それを守り育てていくことの必要性が指摘されています。

重信町の教育を推進していく上におきましても、重信町に生まれ、守られてきた伝統行事を正しく理解し継承していくことが必要であり、そうすることが郷土の先人を敬い、郷土を愛し、郷土にすばらしい文化を創り出す基になるものと確信いたします。

かかる意味で本誌が皆さんに愛読され、親しまれますことを切に期待してやみません。

終わりに、本誌の発刊にあたり、あらゆる分野に御協力いただきました関係の方々に衷心より感謝を申し上げ、発刊のことばといたします。

昭和63年11月3日

重信町教育委員会教育長 野 中 信一郎

この本を読まれるみなさんへ

- 重信町教育委員会では、みなさんが郷土について学習する資料として、すでに「重信のむかし話」「重信の子供の遊び」を発行していますが、続いて「重信の年中行事」を発行することになりました。
- 私たちは、自分の住んでいる郷土の歴史や文化などを正しく知り、郷土を愛するとともに、今後の発展につくしていくことが大切です。ところが、社会のいちじるしい変化につれて、くらしのようすも変わってきたために、むかしから引きつがれてきたいろいろな行事が行われなくなったり、忘れられようとしています。
- そこで、私たち重信町に古くから残されている行事、また、残念ながら、いまは行っていないけれども、むかしの人々がみんなの幸せや作物の豊作などを願って、せいっぱい大切にしていた行事などの一部をまとめてみました。
家庭や学校で読み合い、話し合いながらむかしの人々の苦勞をしのび、そのおかげで、いまのような社会がおとずれたことに感謝の気持ちをもちたいと思います。
- すでに、発行されている資料や地域の人々のお話をもとにえらびましたが、まだまだ、ほかにもたくさんの中行事があり、同じ行事であっても地域によって、内容のちがったものもあります。
そこで、みなさんに、この本をもとにして、もっともっとたくさんの中行事をほりおこしていくと同時に、いつまでも大切にしたいと願っています。

目 次

はじめに
発刊のことば
この本を読まれる方へ

◇ 春

ひなまつり	9
新入学児祈願祭	12
お薬師さん	15
端午の節句	19
花まつり (甘茶)	22

◇ 夏

七夕まつり	27
石鎚講	30
城山天満宮の夏祭り	32
虫おくり	35
輪ごし	38
楽 頭	40
盆おどり	44
百八灯	47
お和田さん	49
おせがき	54
組念仏	56

◇ 秋

たのもさん	61
もともうし	66

お月見	68
八社まいり	71
大杉さん	74
えびすさん	76
ししまい	78
おねり	83
祖霊祭	87
河内三島小まつり	89
亥の子	91
七五三	94

◇ 冬

ごめんさん	99
二つ石大師	102
お日待ち	106
正月七日の行事	108
念仏講	111
節分	113
開運祭	116
伊予万歳	118
伊予神楽	121
米づくりと年中行事	124

おわりに

表紙絵 渡部 良温
題字 梅本 昌一

春



ひなまつり

むかしのこよみの3月3日（今の4月3日）は、女の子の節句・ひなまつりです。ひなまつりには、おひな様をかざり、女の子の幸せをいわうならわしがつづいています。

おひな様には、ひしもちやももの花、しろぎけ、あられなどをおそなえします。はじめての節句には、親

るいなどから女の子に、おひな様をおくるならわしがあります。

わたしたちの町では、明治20年ごろ（100年ほど前）から昭和のはじめころまで土でおひな様（土天神）がさかんに作られ、どの家にも、か



野田天神

ざられました。このおひな様は、北野田で作りはじめたので野田天神といわれています。からだには、松や竹や梅うめのもようがかかれ、顔には、やさしくて、のどかな美しさがあふれています。

野田天神を作りはじめた人は、北野田の東倉市太郎とうくらいちた ろうさんです。東倉さんが人形を作るようになったのは、仕事を休んでいたときに、阿波あわ（徳島とくしま）の浄瑠璃じようり語がたりが来て、「お前、からだが悪いのなら人形でも作れや」とすすめられたからだそうです。

また、昭和20年ころから、東倉とうくらさんに作り方をならった北野田の明賀鶴みよがつた ろう太郎の くびさんや上村の野首しんた ろう新太郎さんがその後をついで作っていましたが、今ではこのような土天神はほと



んど作られなくなったそうです。

4日は「花見」に行きました。おなぐさみともいわれ、近所の方々とおごちじゆうばこそうを重箱（木で作った重ね

合わせのできるお料理箱りょうりばこ)に入れて、川原や山や池の土手の見はらしのよいところに出かけて行って食べました。子どもたちは朝早くから、おべんとうのできるのを楽しみにしていました。おべんとうには、おひな様におあげする、ひしもち、あられ、だいたい、りんまん、しょうゆもち、かんてんようかん、まきずしなどが入れられました。

5日には、おひな様をしまいました。そのとき、あられを少し紙につつんで、おひな様のおみやげとして入れました。おひな様のしまいがおくると、およめに行くのがおくれるといいつたえられるほど、おひな様をだいにしました。

今のひなまつりでは、野田天神は見かけられません
が、女の子のたん生をいわい、幸せをねがう気持ちは、
かわりがありません。そこで、赤いもうせんのひなだ
んに、美しくかざったひな人形をたくさんかざって、
楽しむようになりました。上のだんから、内裏だいりびな・
官女かんじよびな・五人ごにんばやし・矢大臣や だいじん・三人しちよう使丁のほか、び
ようぶ・ぼんぼり・左近さ こんの桜・右近みぎ こんの橘たちばな・ひしもち・
重箱じゆうばこ・たんす・長ながもち・鏡台きやうだい・御所車ごしよぐるまなど、おひな様
にひつような道具の数々があります。

しんにゆうがくじ きがんさい
新 入 学 児 祈 願 祭

上林小学校では、入学式の終わった後、^{うじがみ}氏神様である^{はいし}拝志神社で新入学児祈願祭を行います。

このお祭りには、入学した新1年生とその親、上林区^くの^{くちよう}区長さん、お宮^{みや}のせわをしてくれている人、PTA^{やくいん}役員の人たちがさんかします。

そして、PTAの役員の人たちが、世話をします。

それでは、このお祭りでは、どんなことをするのかをせつめいしましょう。

入学式が終わったあと、新1年生は親たちにつれられ^{はいし}拝志神社へ集まります。

お宮では、^{かんぬし}神主さんをはじめおせわをしてくれる人たちが、むかえてくれます。

みんなが集まると、神主さんが、元気でべんきょうやスポーツができますようにと、おがんでくれます。

そのあと、新1年生をはじめ、さんかした人たちが、神様の前にいっておがみます。

お祭りがすむと、神主さんが、いっしょうけんめいべんきょうする^{だん}ようにとノートをくれます。そして石^{しん}段で写真をと^りり、帰ります。



宮司さんから記念品をもらう1年生

この祈願祭は、ずいぶんむかしから行われており、古い書きものを読んでみると、昭和4年しょうわから書かれています。ですから、もっと前から行われていたのかもしれない。

この古い書きものをみると、このごろの入学式は、4月1日でした。そして、この祈願祭は、今のようにPTAが世話をするのではなく、学校がしていたようです。

ここで、1年生のとき祈願祭にさんかした4年生の感想文かんそうがありますので、しょうかいします。

○入学式が終わった後、神社へ行きました。その日は、

たいへんよい天気だったことをおぼえています。

お宮の前に大きな石の犬がありました。石だんをあがると神主さんが、「よくきたね。」とにこにこしながらむかえてくれました。

お祭りが始まると神主さんは、神様にむかって大きな声でなにかおいのりしていましたが、ぼくには何を言っているのかわかりませんでした。

しかし、ぼくたちのことをたのんでくれているのだなということは、わかりました。

○小さかったわたしは、お宮の石だんをあがるとき、お母さんの着物のそでをしっかりとぎっていました。

お祭りが終わったあとで写真をとりましたが、そのときもお母さんの着物をにぎっていました。

今、その写真を見るとA君が指をピースのかたちにしていたり、かわって行ったM君がへんな顔をしていたり、Mさんは体が半分しかうつっていなかったりして、とてもなつかしく思われます。

わたしは、お宮の前を通るたびに、この祈願祭のことを思い出します。

わたしは、このお宮がいつまでも今のままであったらいいのになあと思います。どうしてかというと一生のこる思い出のお宮だからです。

やくし お薬師さん

たのくぼ こうしやく
田窪の香積

寺にお祭りし
てある御本尊
は「かたて隻手薬師
によらい如来」, または,
「お薬師さん」
とよばれてい
ます。

毎月12日は
えんにち縁日 (お寺の
お祭り) に決
められ, たく

さんのおまいりの人々でにぎわいます。それは, この
お寺でお祭りしているお薬師さんが, 心やからだの病
気を取りはらってくれるお医者さんのような役目をは
たすほとけ仏様だとしんじられているからです。

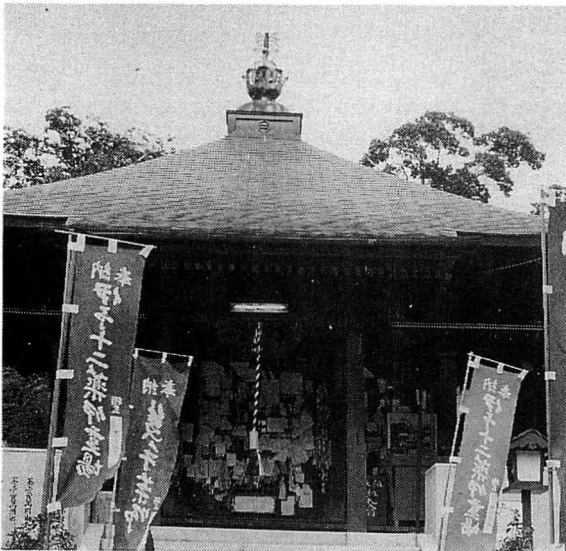
あるおじさんは, 子どものころの思い出を次のよう
に話してくれました。『50年前のことです。ちょうど小
学生のころ, 田窪の春祭りと同じ日に, お薬師さんが



香積寺

ありました。わたしは、手にいぼができていたので、お母さんに、「お薬師さんにおまいりに行っといで」と言われ、お米をふくろに入れておまいりに行きました。わたしは、一生けんめいいぼがなくなりますようにおがみしました。何日かたって手を見ると、いぼはなくなっていました。すぐにお母さんに言うと、「お礼にたこの絵をかいてお堂どうのかべにはってきなさい。」と言われました。わたしは、たこのいぼをいっぱいかいて、お堂にはりつけました。そのおかげか、その後、いぼは一つもできませんでした。』

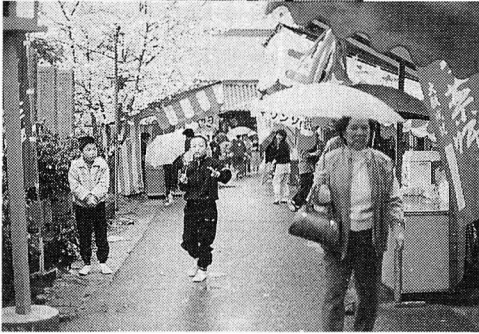
このお寺では、12日のおつとめは、大正15年から1回も休むことなく、つづけられているそうです。



瑠璃殿

30年ほど前に、
るりてん
瑠璃殿を作ってから、
まつ
松山あたりからも、たくさんの人々がおまいりに来ています。

また、縁日には、いろいろな楽しいもようしもあったそうです。



緑日の様子

います。

20数年前には、青年のすもう大会やしばいなどがあり大にぎわいだったそうです。今でも、^{いよまんざい}伊予万歳をしたり、出店がいっぱい立ちならんだりしてにぎわって

▲お薬師さんのおこり▲

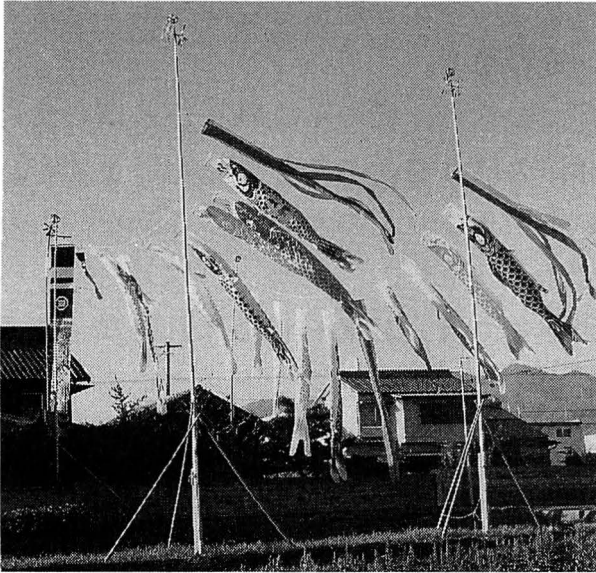
むかし、^{にんじゆ}仁寿元年(852)のこと、田窪の^{いと}井門家の人
が田をたがやしていると、^{やなぎ}柳の木の根元から金色にか
がやく^{ぶつ}金仏を^ほ掘り出しました。井門家では、これを自
分の家で大切にまつていました。

ある日のこと、旅の僧^{そう}がおとずれ井門家にとまりました。
そのとき^{ぶつぞう}仏像の話^{もくぞう}を聞き「しつれいだが長者は
三代つづかずという言葉があります。そのときに、この
仏様をそまつにされてはいけなから寺でおまつり
した方がよいと思います。」とって旅の僧がせおっ
いた^{もくぞう}木造の薬師如来の体内に掘り出された金仏をうめ

こんで薬師様をお祭りし旅立って行かれたそうです。その日から井門さんは病気になり、日ましに悪くなるので、一心に、この薬師様においのりしました。ところが、ふしぎなことに病気はなおり元気になったのです。かれはそれから薬師様をしんじんするようになり、お堂をたててお祭りしました。これが、お薬師さんです。お薬師さんが隻手薬師とよばれているのは柳の木の下から掘り出されたときに、かた手が、こわれていたから。もう一つは、手の悪い病人が、かた手を首につり、かた手で仏をおがむ姿を表すものだといういいつたえからです。

今では、「かた手で仏をおがむ姿を表すものだという方」が、正しいとされているようです。

たんご せつ く
端午の節句



こいのぼり

端午の節句は、男の子にたくましく育ってほしいとのねがいをこめておいわいする行事です。

この行事はむかしから5月5日に行われ、7歳以下

の男の子のあ

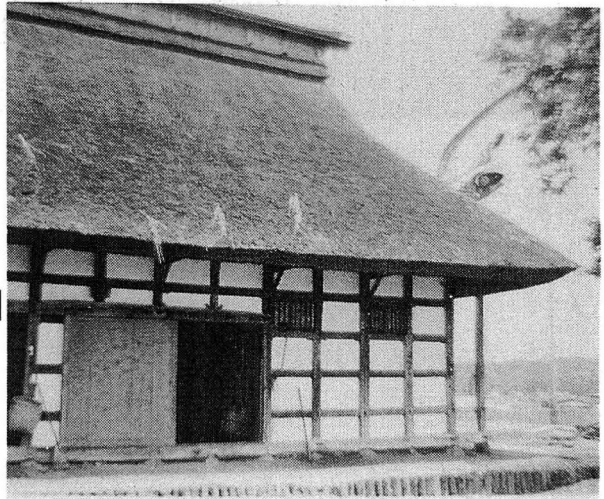
る家では、こいのぼりやふき流しなどを庭先に立てたり、かしわもちやちまきを作って食べたりしていました。

男の子が生まれて、はじめての節句（初節句）には、親るいなどから、のぼりやかぶとなどをおくっておいわいするならわしがありました。のぼりには、男の子のたん生をいわって、色あざやかに家の紋をつけたり、

おさむらいの絵をかいたりしています。長いものでは、9mもあります。こいのぼりは、^{しゅっせうお}出世魚とよばれているこいをかたちどって高くかかげ、しょうらいへのゆめをたくしているのです。また、ふき流しは、赤白または、5色のぬのでつくられています。それは、むかしのたたかいのときにつかったはたにならっていさましさを表しているのです。

今でも、5月になると、緑のそよ風をいっぱい受けて泳いでいるこいのぼりをあちこちで見かけますが、この家にも男の子が生まれたのかとよろこびがつたわってくるようです。

また、端午の節句では、^{しょうぶ}菖蒲を神様におそなえするので菖蒲節句ともよばれ、菖蒲をつかったいろいろなならわしもありました。こんにちでは、あまり見かけませんが、5月4日の夜には、「菖蒲^ふ葺く」(右の写真^{しん})とあって、どの家庭でも屋根の上に、よもぎ



や菖蒲，かやをたばにしてなげ上げ，火事が起きないように，おいのりをしました。さらに，菖蒲の葉をお風呂に入れてそのおゆ（菖蒲湯）につかったり，男の子は菖蒲はちまきをしたり，女の子は，かみにさしたりしました。

このようなならわしは，菖蒲が心や体をきよめ，病気を追いはらってくれる薬草だと思われていたからです。



菖 蒲

（長いかたなのような葉を出し，夏のはじめごろ うすい黄色のきれいな花をつける。）

はな
花まつり (甘茶) あまちや

むかし、インドに釈迦しやかというりっぱなお坊ぼうさんがいました。

この釈迦の生まれた日が4月8日でした。

インドの4月は、美しいいろいろな花がたくさんさいて、たいへんきれいでしたので、日本では「花まつり」という名前で釈迦のたん生日をおいおいしています。

また、この日お寺では、甘茶というお茶をおまいりにきた人に飲ませてくれます。

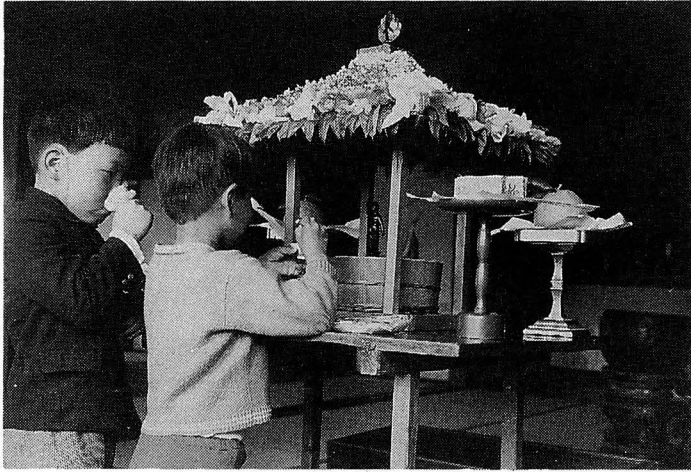
それは、釈迦が生まれたこの日、天からあまくておいしい水がふってきたといういいつたえがあるからです。

さて、上林のお寺ほうれん（法蓮寺）では、昭和20年ごろから4月8日に甘茶をわかし、おまいりにきた人々に飲ませるようになりました。

ところが、昭和30年ごろからは、上林はいしや拝志ぶつきようかいの人たちで、お寺をおまいりするグループ（拝志仏教会）の人たちが、仏様ほとけのりっぱさをひろめようといろいろなもよおしをするようになり、その中の一つとして、5

月5日の“子どもの日”に、法蓮寺で「花まつり」を行うようになりました。

そして、これは今もつづいています。



甘茶をいただく子どもたち

この「花まつり」を、もう少しわしくせつめいしてみましよう。

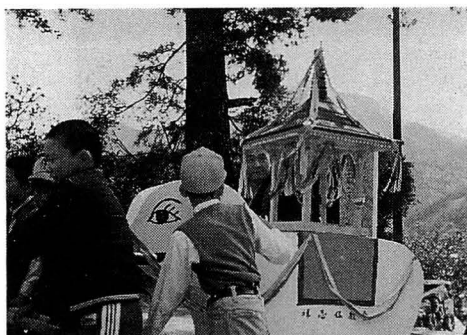
この日、仏教会の人たちと子どもたちが、お寺へ集まります。

そして、「花み^{どう}」という小さなお堂の前で、お坊さんといっしょに、みんながお^{きょう}経をとねえます。

そのあと、子どもたちは、お釈迦様についてのお話を聞いたり、紙しばいを見たり、どうわを聞いたりします。

そして、もけいの白いぞうをつなで引きながら「花まつり」の歌を歌います。

さいごに、「花まつり」のきねんカードやお菓子^{かし}をもらい、甘茶を飲んで終わります。



「花まつり」の歌を歌いながら白いぞうを引く子どもたち



この日の「花まつり」の行事は、上林のほか、下林、上村でも行います。

なお、ほかのお寺で4月8日に花まつりをして甘茶を飲ませてくれるところは、たくさんあります。

夏



たな ばた 七夕まつり

「たなばた」というのは、7月7日の夜、天あまの川の東の岸にある牽牛星けんぎゅうぼしと西の岸にある織女星しよくじよぼしが年に1度会うというお話ですね。そこで人々は、この日にこの二つの星にいろいろなものをおそなえし、ねがいごとをするしゅうかんができました。

この七夕まつりは、東京などでは星まつりともいい、7月7日に行われますが、愛媛県えひめでは1か月おそい8月7日に行くところがおおいようです。

重信町ようちでも幼稚園ほいく、保育所、小学校では7月7日に行っていますが、家庭では8月7日に行っているようです。

では、ここでむかしのおまつりのしかたをしょうかいしましょう。

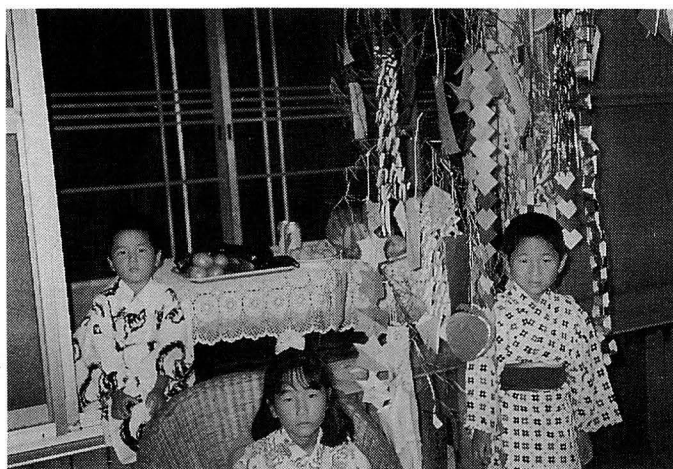
8月6日の朝早く人々は畑へ行って里いもの葉にたまっている露つゆをとってきます。そして、その水をすずりにいれてすみをすります。

そのすみで短冊たんざく（いろいろな色の色紙を長方形のかたちにきったもの）にねがいごとを書きます。（むかしは筆ふでで書きました。）

それを青竹の枝にむすびつけ庭に立てました。

家の中には、スイカやナス、キュウリなどのやさいやくだもの、そして、すすきなどを台のうえにおいて七夕様にそなえました。

そして、子どもたちは七夕の歌をうたい、字がじょうずになりますように、勉強がよくできますようにとおいのりしました。



七夕様におそなえものをしていろうかぞく

なお、ささのかざりは、次の日に川へながしました。今は、川へながすと川がよごれるため、それぞれの家でかたずけています。

この七夕まつりは、重信町内の、ほとんどのちいきで行っています。

では、ここで上林小学校で行っている七夕まつりの様子をしょうかいしましょう。

上林小学校では7月7日に七夕集会を全校で行います。

行事のおもなものは、写真^{しん}のとおりです。

なお、これらは全部^{じどう}児童会が行います。

プログラム

- | | |
|-----------------------------|-------------|
| ① はじめの言葉 | ⑥ ○×ゲーム |
| ② 七夕の歌 | ⑦ ささへのかざりつけ |
| ③ 各学級のねがい事発表 | ⑧ 校長先生のお話 |
| ④ 案山子 ^{かかし} 案山子ゲーム | ⑨ 終わりの言葉 |
| ⑤ 七夕伝説 ^{せつ} の紙しばい | |



全校七夕集会

いし づち こう
石 鎚 講

「石鎚講」は石鎚大権現だいこんげんをしんこうする人の集まりで、「お山講」ともいいます。

「石鎚講」を作っているところには、かならず常夜じょうや燈とうがあり、Ⓢ・Ⓜの文字がきざまれています。Ⓢは石鎚大権現のこどです。(Ⓜは金毘羅こんびら宮ぐうのこどです。)



常夜燈

むかしは、それぞれ講の組に、先達せんだつ（ほら貝・かけじく・講帳をまわす。）がいて、毎月やどを決め、そこに講の人みんなが集まって、常夜燈へ行っておいのりをしました。

石鎚山のお山開きの日には、講のだれかが代表して石鎚山に登り、おがんで帰ります。石鎚山へ登りに行っている家は、門のところにささ竹を立て、しめなわをはって「石鎚山へ登っていますよ。」と、みんなに知らせていました。

今では、だんだん、かんたんになりましたが、上村の4番組では、正月・5月・9月の年3回開いているそうです。

下林すげかねの助兼組でも、7月10日に「石鎚講」を開いています。講の人たちが集まっておいのりをした後、持ちよったお米やお金で、食事をしています。

近ごろでは、こどもたちは、「石鎚講」には、さんかしていませんが、むかしは、おにぎりを食べたりして楽しんでいたそうです。

しろやまてんまんぐう なつまつ
城山天満宮の夏祭り

むかし、上林はなやまじょうに花山城というお城がありました。

今は、このお城のあとに城山天満宮というお宮たが建
っています。

このお宮は、菅原道真すがわらみちざねというえらい人が、上林にき
ていろいろなところを見てまわったとき、のっていた
かごからおりて休んだといういつたえがあります。

お宮のまわりには、こけの生えた石段だんや大きなく
すやつげの木があり、ずいぶん年がたっているなあと
いう感じがします。

しかし、いつ建てられたかは、わかっていません。

このお宮には、俳句はいくが書いてある額がくがかけてあり、
りっぱな絵馬えまもあります。

この天満宮では、7月11日に夏祭りが行われます。
そして、里神楽さとかぐらというおどりが行われます。

このおどりもずいぶんむかしから行われており、は
じまったのは、鎌倉時代かまくら（800年ほど前）だという話
もありますが、くわしいことはわかっていません。

昭和20年しょうわごろから、この里神楽ちゆうしは中止されていまし
たが、昭和51年5月、上林地区くの人々によって、また

始めようという話が、もちあがりしました。

そこで、里神楽保存会ほぞんかいがつくられ、拝志神社はいしの渡部わたなべ宮司くうじさんの教えを受けて、れん習を始めました。

はじめは、なかなかうまくおどれませんでした。が、いっしょうけんめいれん習したかいがあって、夏祭りの日までには、じょうずになりました。

いよいよ7月11日の夏祭りの日がきました。

上林地区の人たちは、里神楽をみようとお宮へ集まってきました。

午後1時から30年ぶりの里神楽をいわう式しきがありました。



里神楽をいわう式

つづいて、午後2時から行われた里神楽は、^{おとな}大人にとってはなみだが出るほどなつかしいものでした。



里 神 楽

里神楽が、ふたたび行われるようになって、はや10年い以上の年月がたちましたが、今も7月11日の夏まつりには、里神楽が行われています。

虫 お く り

虫おくりというのは、いねのがい虫をおい出して田へ入れないように仏様ほとけにおいのりする行事です。この行事は、長い間していませんでしたが、昭和しょうわ60年ごろから行うようになったところもあります。



虫おくり

(1) ひやくまんべ
百万遍

あるとなり組では「^{ひやくまんべ}百万遍」というのをしています。これは神社とお寺で、それぞれ虫ぎどうをしたおふだをいただいて田へ立てる行事です。

お寺では、念仏をとなえていねのがい虫をおいだすようにいのります。「百万遍」の日は、夏の土用^{どよう}の三日めにあたり、だいたい7月20日ごろです。

この日には組長さんの家で、いねのできぐあいや^{せけんばなし}世間話をしていました。今では、夏休み中に組で行う海水浴^{よく}や山登りに行くそうだんをします。



虫おくり



(2) 虫おくり

牛^{うし}渚^{ぼち}では、子どもたちをお寺に集めて、虫おくりの行事をします。1番前にのぼり、つぎにたいこ、3番目にかね、そして、おふだのついたささのじゅんにならべます。このささをもっている子は、左右にふりながら虫をおくりだします。

「ドンデンドーン、ドンデンドーンいねの虫しゃ目むいだ」とはやしながら進みます。お寺を出発した子どもたちは、村さかいをまわって、さいごにおふだを川へ流して帰ります。

お寺ではおにぎりやそうめんを子どもたちに食べさせます。



おふだを川へ流す

わ 輪　　ご　　し

7月30日に、それぞれのお宮では「輪ごし」が行われます。

ひどがたといって、人の形に切った紙に、家ぞく一人一人の生まれた年（十二^し支）・男女べつ・年れいを書きこみます。それを氏神様^{うじがみ}に持って行って、神様にそなえます。あつい夏を元気ですごせますようにと、



輪　　ご　　し

おいのりをします。「カヤ」で作った大きな輪を3度くぐってからおがみます。この輪をくぐることから「輪ごし」といわれるようになったのでしょうか。

おがんだあと、おはらいをしてもらい、おみきをいただきおふだをもらって帰ります。そのおふだは、神だなに祭って家ぞくのぶじをいのりました。

うす暗いはいでんで、白い着物の神主^{かんぬし}さんが、あげるのりとを聞きながら、足音に気をくばって、しずかに輪をくぐると、心が落ち着き、みがひきしまる思いがします。

みなさんも、近くの氏神様へ行って「輪ごし」の様子を見て、みのひきしまる感じをたいけんしてみるといいですね。

このごろでは、世話をする人が、組内のみんなのひとがたを集めて氏神様に持って行き、おがんでもらうところもあります。

あつい夏をぶじにすごしたいという、むかしからのねがいは、今もかわりがありません。

今でも、夏にはなくてはならない行事の一つとしてどのお宮でも、さかんに行われています。

がく とう
楽 頭

しょうわ げいのうひやくせん
昭和46年9月、NHKの「芸能百選」で、白い着物を着たおにが、大だいこと小だいことかねをたたきながら、おどる様子をテレビ放送しました。そのためこのおどりは、全国に知れわたりました。

このおどりとは、^{やまの}うち ^{ふもと}の麓組に古くから（300年前とも500年前とも言われる。）つたわる楽頭というおどりです。

このおどりは、^{せんぞ} ^{れい}先祖の霊をなぐさめ、農作物がよくできることを、また、組中が安全であることをねがって8月14日の夜に行われています。

このおどりに使う面は、^{ごめんさま}御面様とよばれ、麓組の「^{だいましょうじん}五十八社大明神」という社に^{やしろ} ^ご ^{しんたい}御神体として祭られ組の人たちがしんこうしています。

御面様には、こんな話があります。

大正のはじめ（70年ほど前）に、御面様がぬすまれました。しかし、何か月か後に、神様の力で社にもどってきたので組中でおいおいをしました。

また、雨ごい御面様としても、ごりやくがあります。ある年、日でりつづきで田植えができなくてこまっ

ていました。組の人たちは、みんな出てきて3日間、おいのりしては、この御面様をかぶっておどりつづけました。すると、急に、くもってきて、雨がザーザーふってきました。そのため、田植えができ大よろこびをしました。水がなくなってこまっていた志津川しづかわの人たちも、この雨で水が流れてきたのでたいへんよろこび、1斗とだる（18ℓ）のお酒をお礼にもってきました。

それからは、山之内のいろいろなところで、このおどりをするようになりました。



楽頭おどり

8月1日から8月13日まで、毎ばん、村の若い人たちが集まって楽頭おどりのれん習をしました。そして、8月14日に社の中で、御面様をかぶり、神主さんののりとに合わせて、おどっていました。だから、御面様を村の人たちは見たことがなかったのです。

しかし、このおどりが重信町の文化財に指定されてからは、8月14日に御面様をおがむことができるようになりました。

今では、おどりをれん習する若い人も、ほとんどいなくなつて、30年ぐらい前からは、8月14日だけにおどるようになりました。

楽頭おどりは、大だいこを持つ人、小だいこを持つ人、かねを持つ人の3人でおどります。

大だいこ、小だいこを持つ人は、それぞれ、たいこをおなかのところにつけます。大だいこをコテカンツンテンと打って、「ばち」を高くふりかざすと、小だいこの人は、こしをかがめて、コテコテコテと打ちならします。次は、大だいこの人がコテカンツンテンと打つと、それに合わせて、かねの人がカンカンカンと打ちます。

これを見ている人たちは、東と西に分かれて、
「ナミアミダーブヤ、ナーマミダー。」
「ナミアミダーブヤ、ナーマミダー。」
と、かわるがわる念仏をとなえます。

神主さんがのりとをあげだすと、おどり手は、コテカンツンテン・コテコテコテ・コテカンツンテン・カンカンカンと、ぐるぐるまわりながらおどります。

神主さんが終わりの合図をすると、念仏も、おどりもやめてしまいます。

おどりが終わってしまうと、来ている人たちみんなにお神酒みきがくばられ行事が終わります。



楽頭おどり

ぼん 盆 おどり

盆おどりは、8月15日に先祖^{せんぞ}をお祭りする「お盆」という行事があり、そのときにおどられたので、この名前がついたといわれています。

お盆のおこりについては、次のようないつたえがのこされています。

お釈迦^{しゃか}様というりっぱな坊^{ぼう}さんに教えをうけている人の中に目連^{もくれん}という人がいました。

目連は、いっしょうけんめい勉強したので、ふつうの人には見えないものが見えるようになりました。これを神通力^{じんつうりき}といいます。

お母さんがなくなったとき、あの世（死んだ人がいくところ）でどんな生活をしているかが知りたくなったので、神通力を使って見てみました。

すると、お母さんは、じごくというおそろしいところで鬼^{おに}たちにいじめられながら、苦しい生活をしていました。

心のやさしい目連は、さっそくお釈迦様にそうだし、母をたすける方法を教えてもらいました。

そして、ふたたびあの世^{せんぞ}をのぞいてみますと、こん

どは、ごらくというたいへんよいところで、楽しく
くらししていました。

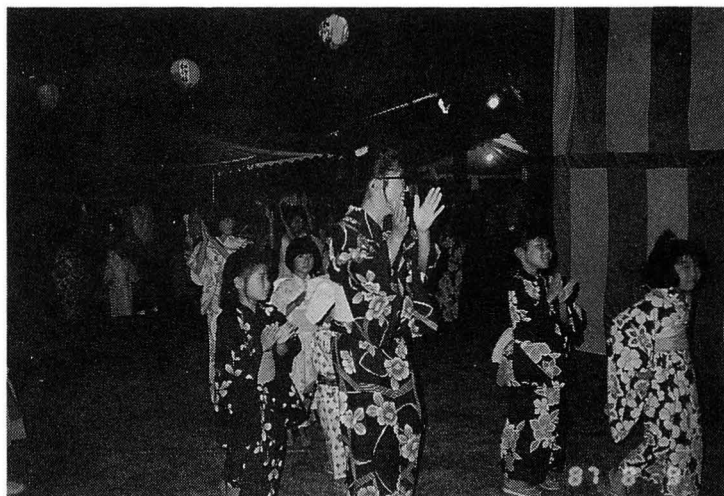
目蓮は、うれしさのあまり、とびあがってよろこび、
むちゅうでおどりました。

この日が8月15日でしたので、この日を中心に先祖
を祭る行事を行い、盆おどりをおどるようになったと
いわれています。

では、ここで上林地区くの盆おどりをしょうかいしま
しょう。

上林地区でいつごろから盆おどりが始まったかは、
はっきりしていません。

たぶん、上林にあるお寺（法蓮寺ほうれん）が建てられたこ
ろ（400年ほど前）だろうと思われれます。



法蓮寺の盆おどり

それからずっとつづいているわけですが、一番さかんなころは、お寺の庭に小屋が建てられ、そのまわりで小さな子どもから大人まで、たくさんの人々がおどりました。

また、15日のほかに七日盆とか裏盆うらにもおどられていました。

しかし、時代がかわるにつれて、だんだんおどられなくなってきました。

そこで、昭和52年に上林盆おどり保存会がつくられ、今では、前のようにさかんになりました。

昭和58年の保存会の記録ろくによりますと、おどりは九つあり、その名前は、次のようになっています。

<small>いせ</small> お伊勢おどり	<small>おうぎ</small> 扇おどり	<small>かさ</small> 傘おどり
<small>さんちようめ</small> 三丁目おどり	<small>はながさ</small> 花笠おどり	<small>ひようご</small> 兵庫おどり
バンバおどり	<small>ほうねん</small> 豊年おどり	<small>ねんぶつ</small> 念佛おどり

なお、豊年おどりは、上林小学校の運動会で全校児童じにより毎年おどられています。

ひゃく はっ とう
百 八 灯

夏の夜、暗やみの中に点々と火の列ができ、美しいけしきが見られます。

それは、お盆^{ぼん}の15日の夜のこです。志津川^{しづかわ}の下池の土手。ふだんは、ぎっ草が生え、春には、つくしが生えて、にぎわう土手に美しい火がー列にならんで見えます。

この火の数を百八とは決めていませんが、土手の東から西まで、かなり長いきよりの間を、たくさんの火が、いっせいにもえ上がります。

これは、祭り手のいない^{ほとけ}仏様^{わか}や若いのに病氣や事こでなくなった人たちのためのくようとして、行われている火祭りだそうです。

志津川の子ども会で集めた空きかんに、^{とうゆ}灯油を入れてじゅんびをします。それを土手にー列にならべます。

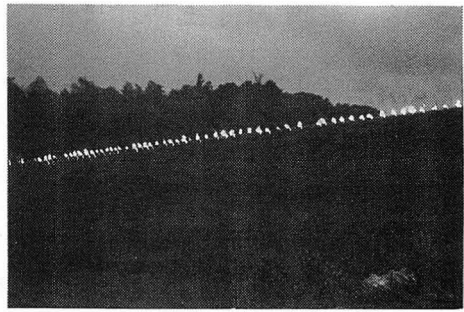
夜になると、PTAの人たちが集まって、いっせいに灯油に火をつけ、百八灯をともすのです。

むかしは、係の人たちが、たいまつをたくさんじゅんびし、それを昼間にー列にならべておきました。そして、おそなえとして、米やせんこうをおきました。

日もくれ、暗くなると、係の人たちは、手分けしてたいまつに、いっせいに火をつけます。すると、たいまつは同時にもえあがります。

志津川の人たちが、下池の土手を見上げると、なかなかきれいなものでした。

このようにして、村の人たちは、幸せでなかった人人にも、あたたかい祭りごとをしてあげるのです。



下池の百八灯

にしのおか

西岡でも、子ども会の行事として行っていました。

昼のうちに、家々をまわって、たきぎをもらい集め、これを切りそろえてたばを作り、天神橋てんじんばしの近くに一列にならべ百八灯の用意をしました。こうして、暗くなるのを待ち、手分けしていっせいに火をつけ、長い火の列を作っていました。近ごろは、たきぎの用意もできにくくなり、火祭りをしなくなりました。

お和田さん

8月15日は、お盆。この日は、祖先の霊をむかえて、なぐさめ、お祭りをする日です。

14日に霊むかえをし、15日に霊送りといって、どの家も、おはかまいりをしています。

ちょうど、この日は、お和田さんのお祭りがあります。

志津川の北山の中ほどに広場があり、そこには、和田河内守吉盛を祭っているお堂があります。「お和田さん」「お和田さん」といわれて、村人から親しまれています。

自分の家の霊送りをした後、ここへ集まって、みんなで、盆おどりをほうのうします。

これは、むかし、お和田さんがはやり病から村人を守ってくれたことに感しゃし、病氣にならないようにおねがいでするおどりです。

和田河内守吉盛は、合戦のどちゅう、おなかがいたくなって、たたかいが思うようにできなくて、負けてしまいました。死ぬまぎわに

「自分は、おなかの病氣のために、むねんなことにな

った。これから後、おなかの病気に苦しむものは、わたしをたよればなおしてあげよう。」

と、言ったことから、おなかの神様として有名になりました。

村に赤痢がはやった時、ふだんから、おどりをほうのうし、よくおまいりをしていた人は、かからなかったり、また、かかっても軽くすんだということです。

この話を聞いて、ずいぶん遠くの村からも、おどりに来ていました。

おどり場は、お堂の前の広場で、まん中にやぐらを作り、「くどき」をとなえるおじさんが一人、たいこをたたくおじさんが一人、入ります。このやぐらを中心に、まるい輪わになり「くどき」に合わせて、

「アーラ、ヨイヤーサーア、ヨイヤーサ」

というかけ声で、スローテンポの「バンバ」おどりをします。また、はやいテンポで、

「エンエノヤーノ、ヤーノヤ」

というかけ声の「キヤマ」おどりもします。

おどりは、かんたんなもので、輪の中で音頭おんどに合わせて、何となく左回りに動いておれば、しぜんにおぼえられるから、だれでも気軽にさんかできます。赤ちゃんの病気よけのため、かたぐるまにしたり、せおったりしておどる大人おとなもいます。

また、この盆おどりは、8月15日だけでなく、む

かしのこよみの9月8日のお和田さんのたん生日にも
ほうのうされます。



お和田さんの盆おどり

この日には、盆おどりをほうのうした後、大人も
子どももみんな通夜堂つやに集まってお通夜をします。大人
の人たちがこわい話やおもしろい話を明け方まで子
どもたちに聞かせていました。今では、ちょっと、ひ
と休みするていどになりました。

むかしは、お和田さんの日は、夏の縁日えんとしても有
名で各地からたくさんかくの人が集まって来ました。その
ため、わたがしやかき氷、トコロテン、ラムネ、風せ

ん、ほおずき、着せかえ人形、花火、ふえ、ニッケ酒、^{しゅ}いかやきなどを売る店がならぶので子どもたちは楽しみにしていました。

また、青年のしばいもありました。

村の青年たちは、お盆の1か月ぐらい前から、しばいのれん習に取りかかります。夏の夜、仕事を終えた青年たちは、毎ばん、毎ばん集まってれん習をしていました。

れん習する青年たちも、れん習を見に行く大人や子どもたちも、夕すずみをかねた一つの楽しみでした。



しょうわ
昭和23年 青年しばいに出た人たち

15日・16日の夜は、家ぞくみんなでおべんとうを持って、お和田さんの広場にたてたしばい小屋の前に集まって来ます。

ほとんど顔がわからないくらいに、おしろいでけしようにした近所のおにいさんたちに声えんをおくります。まくあいでは、となりの席の人たちとかんてんようかんやおまきずしをあげたり、もらったりしながら食べていました。しばいは、夜がふけるまで、つづけられていました。

今では、盆おどりやカラオケ大会、もちまきにかわっています。

15日には、お和田さんに、おもちをそなえてお祭りを行います。

昼ごろ、おっさん（お坊^{ぼう}さん）が、その祭だんをおがみます。それがすむと、おそなえしていたおもちで、もちまきをします。このおもちを食べると、おなかの病気にならないというごりやくがあるそうです。

夜になると、カラオケ大会が始まります。しんさをし、じょうずな人は賞品^{しょう}がもらえます。歌う人も聞く人もこの日を楽しみにしています。

近ごろは、「バンバ」や「キヤマ」おどりだけでなく、重信音頭^{おんど}や他の盆おどりもして、みんなで楽しんでいます。

お せ が き

「おせがき」というのは、お経きょうをあげたり、おそなえ物をしたりして、なくなった人のたましいをなぐさめることです。

重信町では、どのお寺でも「おせがき」をしています。本堂どうにていねいに祭だんを作って、お祭りをしてくれます。そのために、5・6日前に組で「おせがき」の費用ひを集めることになっています。

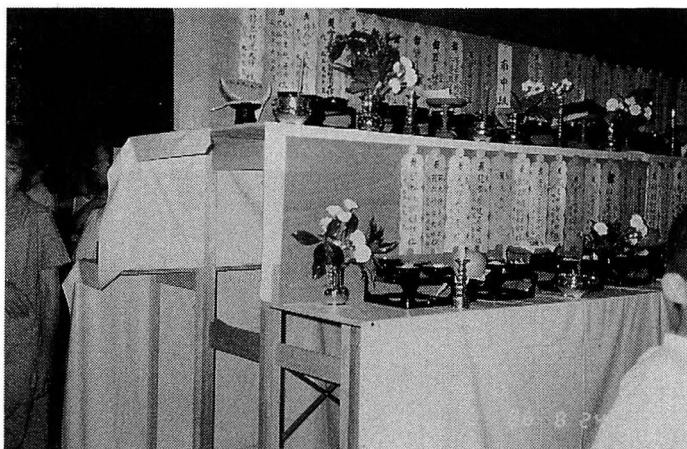
下林だいらんの大安寺は8月16日、上村でんしゅうの伝宗寺は8月21日・田窪たのくぼの香積寺は8月23日・下林じょうどの浄土寺は8月24日・牛淵うしぼちの道音寺は8月24日・野田さいこうの西光寺は8月20日・志津川つかわの慈光寺は8月26日・上林ほうれんの法蓮寺は8月21日・山之内やまの うちの福見寺は8月24日に、それぞれ「おせがき」を行っています。(重信町誌しによる)

この日、それぞれの家では、先祖せんぞのおはかのそうじをしておそなえをします。

この夜は、なくなった人のたましいをなぐさめるために、盆ぼんおどりをします。やぐらの下にちょうちんをかざって、婦人会や青年だん・子どもやお年よりが集まって、夜のふけるまで何時間もおどります。

また、たくさんの出店でにぎわいます。たいやき・たこやき・氷・きんぎょすくい・いかやき・くじびきおもちゃなどがあって、子どもたちの楽しみの一つとなっています。

お寺にきれいにかがられた、先祖代々の位牌だいたい いはいをおがむと、むかしの人の様子がしのばれて、なつかしい気持ちになります。家ぞくそろっておまいりをして、おそなえ物をいただいて帰るならわしです。

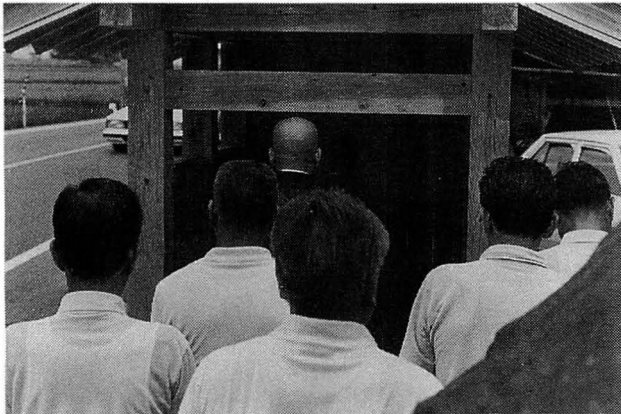


「おせがき」の祭だん

組 念 仏

8月は、それぞれの家庭でお盆^{ぼん}の行事が行われ、それがひと通り終わるころ、組行事としての組念仏が始まります。

組念仏というのは、志津川^{しっかわ}のあちらこちらにあるお地ぞう様の前で、組ごとに行われます。そして、どの組は何地ぞうの所でというように、受け持ちが決まっていました。しかし、念仏の日どりは、8月16日、24日、28日というように組によってまちまちでした。



お地ぞう様の前での念仏

組念仏では、当元^{とうもと}という世話係がいて、食事やお地ぞう様のおそなえ物のじゅんびをします。この当元は、組内の家がじゅん番でします。

当元の家では、念仏の2日か3日前になると、組中を回って米を2合か3合（3.6dl～5.4dl）と、いくらかのお金を集めます。

念仏の日が来ると、だんごを作ってお地ぞう様におそなえし、念仏のかね^なを鳴らして組中の人に知らせます。人々がお地ぞう様の前に集まると、みんなでお経^{きょう}をあげておがみます。

また、この日当元の家では、おむすびをたくさん作り、集まって来た子どもたちに、お菓子^{かし}といっしょにくばります。このおむすびは、志津川では「もぶりめし」西岡^{にしのおか}では「きなこむすび」が多かったそうです。

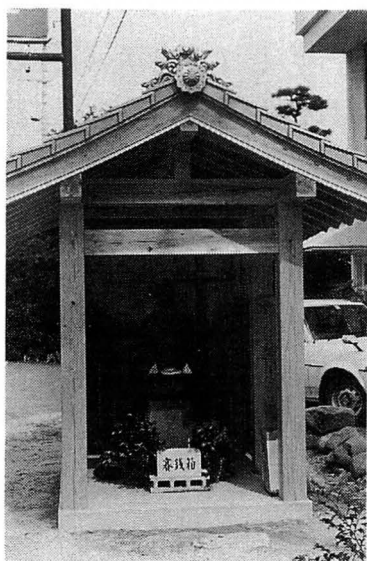
このように組念仏は子どもたちにとっても楽しい行事のひとつでした。

大人^{おとな}の人たちは、お地ぞう様をおがんですむと、当元の家でごちそうを食べます。男の人たちにはお酒も出て、なごやかなふんい気になり、いろいろな話が出てにぎやかになります。町内や組内のニュースを知るのも、いろいろなそうだんをするのも、この時でした。

組内にこまったことがあると、みんなで助け合う気持ちが強かったのです。むかしは大雨がつづくときよくこう水になり、ていぼうが切れて田畑や家が流されま

した。こんな時、組の人々は、みんなで力を合わせて後かたづけや田畑をもとのようにするためがんばりました。また、病気やけがでこまっている時は、組中の人がこうたいで出て田の仕事などを手伝ったりもしました。

今でも、このような習かんがのこっていて、組内に不幸ごとがあると、みんなが出てお手伝いするようになっているところが多いようです。



志津川にある地ぞう

秋



たのもさん

もう、50年あまりむかしのことですが、第2学期の始業式（9月1日）が終わると、^{よこが} ^{わら}横河原の男の子は先をあらそって家に帰り、高学年のさしずでリヤカーをひき家々を回って行きます。たきぎを集める人、おそな^{りよう}え料をいただく人。やがて、リヤカーにたきぎがいっぱいになると、二本松^{まつ}（今は、^{わかみや}若宮さんのあるところ）に帰ってきます。

次は、大人^{おとな}の手もかりて、あせを流して、土ひょうをつくる人、リヤカーを引いて、せいざいへおがくず（木をのこぎりでひくとできる小さな木のくず）を取りに行く人……。数時間かけて、やっと、じゅんびかんりょうです。

家に帰ってみると、おばあさんが、色紙とキビガラ（いまのはっぽうスチロールのようなもの）を使って、人形を作っています。とくに、赤とむらさき色のしまもようの紙の人形が心にのこっています。

おばあさんは、手を休めては、

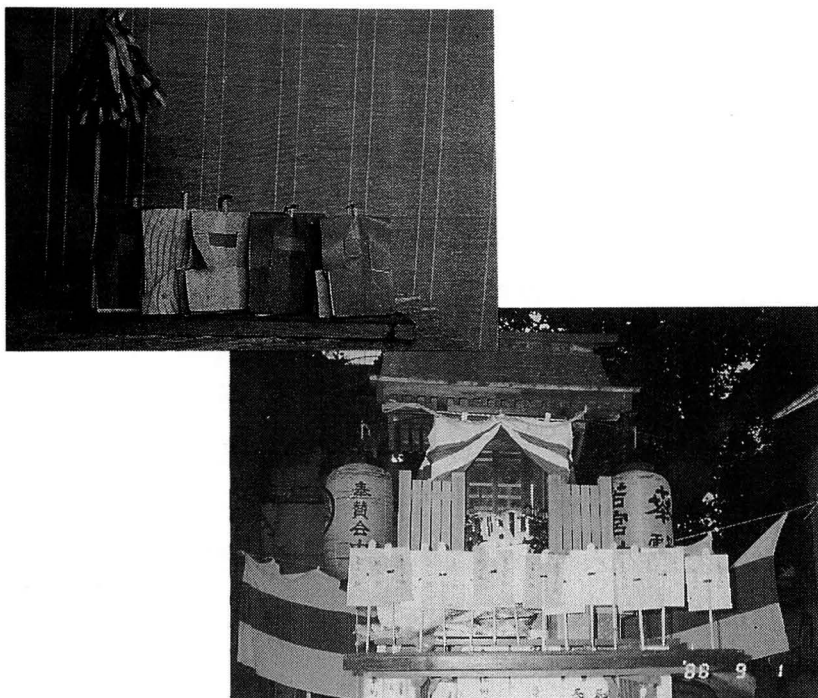
「これが ^{せんぞ}ご先祖さん」

「これが おじいさん」

「これが あんた」

と、いうふうに、たくさんの人形を作り、板に竹くぎを打ったものに、じゅんじゅんと立て、^{とこ}床の間に祭ります。

さて、昼間じゅんびした二本松の広場には、日ぐれとともに、近くの大人も子どもも集まってきます。リヤカーで集められたたきぎに火がつけられ、そのあかりのもとで、先ほど作った土ひょうで子どもずもうの始まりです。けい品は、もちろん、家々からいただいたおそなえ料で買ったえんぴつや下じきです。



たのもさんの人形

体の小さかったわたしは、

「ハッケヨーイ、ノコッタ」

の合図とともに、立ち上がり、す早くおしの手か、または、下手をとり、あい手のむねまで首を入れ、カいっばいであい手を自分の後へ投げる（かつぐ）などして勝ったものです。けい品でもらったえんぴつをたくさんためた楽しみを思い出します。

やがて、糸こんぶの入った、まぜごはんの「にぎりめし」を手もあらわず食べるのですが、少ししおからいその味は、今でも、したの上のにのこっているような気がします。50年前からわたしも知っていますが、それよりも、もっともっと、むかしからつづいていたと聞いています。

今も行われており、横河原下半分（上は重信川ぞいの手^{びき}曳松で行っている。）の各^{かく}小組から、当元^{どうもと}（お世話する家）が二人ずつ出て、どの家からも 300円あて集めたおそなえ料（今年は 58000円あまり）を持って若宮社（二本松）前に集まります。女^めの人は、横河原公民館^{みん}をかりて、さっそく「にぎりめし」をつくりま^す。男^{おとこ}の人は、のぼりを立て、ちょうちん^{こうはく}つり、紅白のまくはり、そして土ひょうつくり（2年前から、すもうマットを買った。）といそがしそうです。

夕方、宮司^{ぐうじ}さんをまねいて、まず、お祭りをします。おそなえのお酒が毎年20本近く集まります。

次に、すもうが始まります。

世の中がかわるにつれて、さい近は、女の子もすもうをとり、男の子が女の子になげとばされ、土ひょうをとりまく大ぜいの人々の間から大きなかん声がおこります。

むかしのたき火は今はなく、木の枝にはだか電球えだ きゆうが下げられています。

やがて、すもうがひと休みになると、まぜごはんの「にぎりめし」が出ます。立ったまま食べる人、持ってきたナイロンぶくろにつめて、さっそく家へと急ぐ人、むしろの上でお神酒みきをいただく人……。そして、すもうは、大ぜいのおうえんの中で、夜おそくまでつづけられます。

むかしは遠く砥部町とべあたりから「こんぴらかいどう」の目じるしとなっていた二本松も数年前、じゅみょうがつきてたおされました。

若宮社の御神体ごしんたいは、黒色の横たわったたぬきのやきもの（別に、たぬきのでんせつがある。）ですが、これと「たのもさん」との関係かんけいは、はっきりしていません。

近ごろは、色紙で人形を作り、おそなえ料を集めた小組名を、それぞれに書いて、神様の前に祭ることにしました。

9月1日といえば、ちょうど、二百十日ごろで台風がよく来る季節きせつであり、秋のみのりをひかえ、農家の

人たちが米作りのふじ^{ほう}豊作をいのる「田の^み実さん」の
ことが「たのもさん」といわれるようになったそうで
す。



若宮社の子どもずもう

もともうし

もどのお祭りの日を「もともうし」とか「もどまつり」とかいいいます。

三み奈な良ら神社では、むかしのこよみの8月6日（今の9月6日）を「もともうし」といい、助すけ兼かね組ぐみの人がお通つ夜やをしています。また、この日のことを「大だい松まつさんのおつや」ともいいいます。

それは、むかしいつごろのことかわかりませんが、大松を切ったために、組によくないことばかりが起りました。こまった組の人たちは、「大松大み明やう神じん」として、毎年この日にお祭りをするようになったと、いつたえられています。

この日、助兼組では、山の神様「奈良原な神社ら」のお通夜もいっしょに行っています。このお通夜のとくちようは、たきごみのおむすびです。この味は、わすれられないふるさとの味となって、今ものこっています。

また、三奈良神社の「もともうし」は、秋祭りのしげいこの始まりの日でもありました。「便びんなしより」といって、この日は便（知らせ）がなくても、青年は

みんな集まらなければならぬ決まりでした。集まらないと、ばっせられることになっていて、たいへんきびしいものでした。この日に、ししげいこの計画や秋祭りのいろいろな係を決めました。

今は、集まらなくてもばっせられるようなことはなくなりました。前もって集まる日を知らせるようにしています。



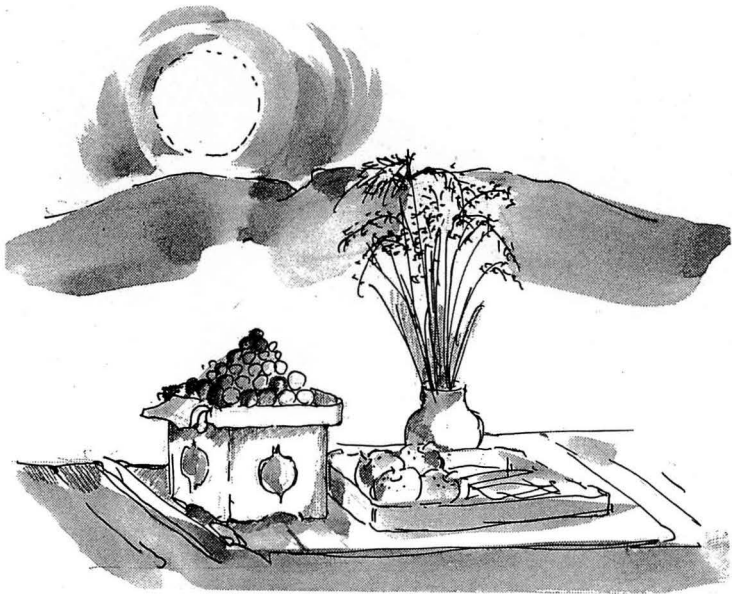
三奈良神社

お 月 見

9月の満月まんげつを、十五夜・いも名月・仲秋ちゅうしゅうの名月などとよんでいます。

この月の十五夜は、年中でいちばん美しいお月様なので「月づきに月見る月是多けれど、月見る月はこの月の月」とうたわれているほどです。

この日は、さといもをはじめてほってきて、初物はつものとして食べました。また、むかしはふだんの日は麦ごは

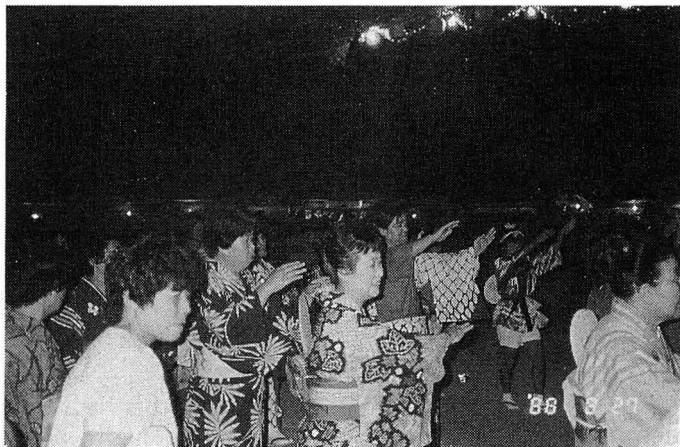


んを食べていましたが、この日は「おもぶりごはん」に、さといも、えだ^{まめ}豆、おだんごなどを食べて家ぞくそろってお月見をしたのです。

お月見というのは、お月様のよく見えるえんがわなどに、すすきをかざり、秋のやさいやおだんごなどをそなえて、お祭りしたり、お月様をながめながら秋の夜を楽しんだりしたのでしょうか。

近ごろは、このようなお月見をする家庭は少なくなりましたが、町の商工会^{しょうこう}が中心になって「観月祭」^{かんげつさい}がにぎやかに行われるようになりました。

横河原^{よこがわら}の観月祭は、毎年9月の名月にもっとも近い

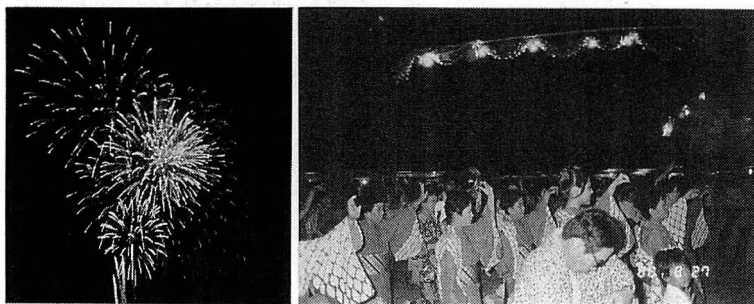


月見おどり

土曜日に行われます。横河原橋のたもとの川原を会場にしてくり広げられます。近ごろでは、「愛媛のまつり50選」にえらばれるほど、年ごとにさかんになってきています。地元の重信町や川内町だけでなく、松山や遠くの方からも大ぜいの見物人が集まり、3万人あまりの人々でにぎわいます。

観月祭は、地元のおどり連によるにぎやかな「月見おどり」で幕をあけ、生け花展、お茶席、俳句会などがありますが、一番人々の目をうばうのは、「花火大会」です。

このような観月祭は、横河原地区の人々が苦勞してきずきあげてきたもので、昭和25年ごろ、戦後おとろえかけた横河原の商店がいをとてなおそうとして始めた「街道おどり」がそのおこりだそうです。そして、昭和30年ごろから広場でおどるようになり、昭和34年から今のところに広場を決めて行われるようになりました。その後、年ごとにさかんになってきています。



花火と見物人

はっ しゃ
八 社 ま い り

ひ がん し つ かわ はちまん にしのおか
9月の彼岸中に、志津川の大森八幡さん、西岡の岡
八幡さんに、のぼりが立ち、農家の人たちがつぎつぎ
におまいりに来ます。



大森八幡さんとおのぼり

この日をお社日しやにちとよんでいます。お社日というのは田の神様が田へ来たり、帰ったりする日のことです。

なぜ、彼岸中に社日があるかというど、こんな話があります。

大むかし、彼岸と社日というすもうとりがいました。ふたりですもうを取るようになったとき、彼岸が、「ちょっと待ってくれ。一ぜんめしをくうて来るから先に行きよってくれ。」と、言ったのです。

社日は、彼岸をたまがしてやろうと思って、大きなえの木に登って待っていました。

彼岸が来たので、木の上から石を落として、たまがそうとしました。ところが、石のあたりどころが悪く、彼岸は死んでしまいました。

社日は、彼岸をたいへん気のどくに思い、「かわいそうなことをした。すまん、ゆるしてくれ。」と、言ったそうです。

このことから、彼岸は7日間、社日は1日祭ることにしたということです。

この社日つちのえが「戌の日」に当たるので「土の神」として祭っています。

秋の社日は、神様が仕事を終えて帰るので夜に祭っています。農家の人たちは、米がたくさん取れたことをおいおいするために、色づいたいねのほや、田いも

を八幡さんにおそなえます。

この日には、近くにある八幡さんをつぎつぎとおまいりして回ります。

近所の人たちがそうだんして集まり、歩いて八つの八幡さんをおまいりします。

これは、その地方の米などのできぐあいを見てまわることにつごうがよいからだそうです。

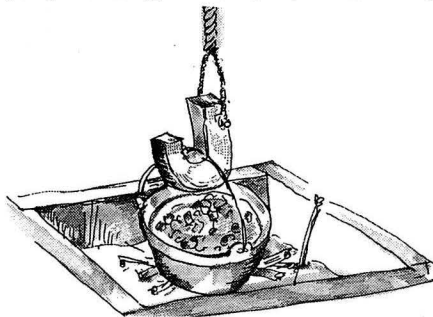
おまいりがすむと、集まった人のうち、二人が当番になり、田でとれたものをたいてごちそうをつくりま^みす。みんなでごち^きそうを食べたり、お神酒を飲んだりしておいわいをします。

「あそこの大根は、日当たりがよくてようできとった。」

「今年は、米がよくみのってうれしいことだ。」

「来年は、あそこへ、いもを植えるとよくできるぞ。」などと、話し合います。

農家の人たちは、八社まいりをしながら、農業で大事なことを見て回っては、話し合い、たくさんの米ややさいがとれることをいのっているのです。

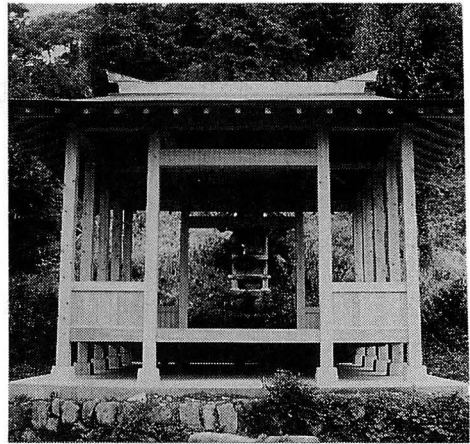


おお ^{すぎ}
大 杉 さん

しょうわ 昭和13年まで ^{ひのくち}樋口には、村中からみることのできる大きな杉の木がありました。この杉はたいへん古い木で、中が空洞（^{くうどう}ほら^{あな}穴）になっていました。この木の空洞からある日、けむりが出ていました。人々はおどろき「大杉さんがもえよる。」と、言って、火を消そうとしましたが、木があまりにも大きいので、なかなか消えませんでした。この火事がもとで、大杉さんはかれてしまいました。

この大杉さんのもとに、お荒神さん（^{こうじん}こうじん）を祭った「かまど神社」があります。この神社のお祭りは9月29日に地元（^{くぼ}くぼ）の久保組の人々の手によって行われています。

夕方に神事が行われ、



かまど神社

かがり火がたかれます。このかがり火のたき木は、子どもたちが家々をまわって、すもうの花（すもうのけい品代）といっしょに集めます。

神事が終わったあと、子どもたちのすもうがほうのうされました。また、ししまいも行われました。樋口の青年たちは、9月のはじめから秋のお祭り（今の地方祭）に行われるししまいのけいこを始めます。そして、大杉さんの祭りの日にけいこの様子を人々に見てもらっていました。

今は、子どもが少なくなり、子どものすもうはなくなりましたが、大人が^{おとな}集まり、神事のあとでカラオケ大会が行われています。

久保組は、お荒神さんを祭っているため、火事はおこらないとつたえられています。

えびすさん

10月の秋祭りの前に、^{ひのくち}樋口の^{えびす}恵比須神社で、樋口の人や近くに住んでいる人々がおおぜい集まって、「えびすさん」のお祭りをしていました。

夕方、神事が行われたあと、火がたかれ、ししまいのほうのうや子どもずもうでにぎわいました。

明治のころ（100年ほど前）から始まったとつたえられています。村の子どもたちは年中行事の一つとして、楽しみにしていました。

子どもたちは、お祭りの前の日に家々をまわり、「まきと^{はなだい}花代をおねがいます。」とあって、たき木とお金を集めました。集めたお金で、すもうのけい品として、ノート・えんぴ



えびす神社

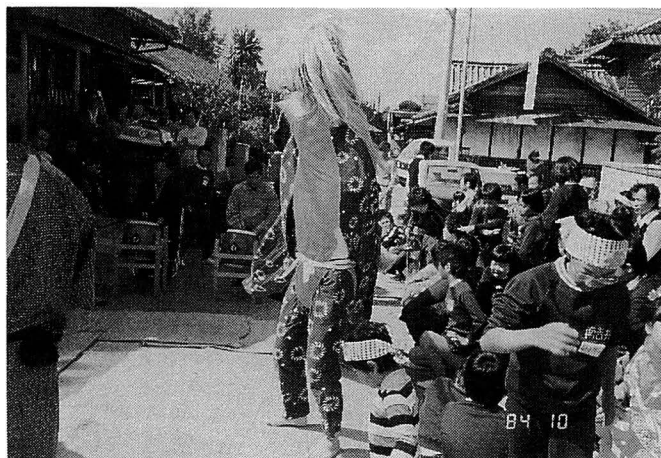
つ・消しゴムなどの学用品を買いそろえました。

今とちがって、十分なあかりもなく、また不自由な
ころでしたが、うす暗い土ひょうのそばでかがり火が
もえ、おおえんのおとなもおおぜいさんかして、にぎや
かなものでした。

今でも、10月1日に、地元の恵比須組の人々によっ
て、お祭りが行われています。前のようなにぎやかさ
はありませんが、組内の家ぞくが集まって楽しいひとと
きをすごし、おたがいに心をかよわせる場になってい
ます。

し し ま い

「トンチキチ・トンチキチ」とししまいのたいこの音が、公民館^{みんな}から聞こえてくるのは、9月もなかばをすぎたころからです。秋風とともにたいこの音が聞こえてくるのは、とても楽しみなものです。祭りは10月6・7日に行われ、松山^{まつ}祭りと同じ日です。



ししまい

南野田のししは、男じし、あらししといわれ、とても元気のよいししです。このししまいはどこからつた

えられ、どう受けつがれているのでしょうか。

今から、150年ほど前の文化年間のことですが、そのころの三嶋神社の氏子の人たちが、高井（松山市高井町）へならいに行つて、それをいろいろくふうして今につたえているそうです。あるお年よりは、次のように話してくれました。

「私は、明治43年の生まれでなあ、もう60年もたいこをたたいどることになるんぞな。17の年に学校を出て、すぐに青年だんに入ったのよ。はじめの年は毎日、毎日、竹のバチをけずらされました。何回持つていっても、けずったバチをおられて、なかなか合かくさせてもらえなんだ。やっと合かくすると、こんどは、たいこのそばで、たいこに合わせて、ゆかをたたくけいこをしました。それがでけるようになるとやっと、たいこをたたかせてくれるんじやが、この時のうれしかったことは、今でもおぼえとらいな。けいこはきびしゅうて、出て行かなんだら、よびに来よりました。やどというて、公民館の近くの家長屋をかりて、けいこ場としとりました。とてもきびしゅうにしこまれたものよ。」

このように、青年だんが中心になつて行つていまし

たが、^{しょうわ}昭和25・26年ごろに、青年の人が少なくなってししまいもなくなってしまいました。

そこで、ししまいをもう一度行いたいという人たちが集まってそうだんをして、ししまい^{ほぞん}保存会ができました。昭和28年ごろのことです。トラックの^お台におみこしをのせて、^お御旅所まではこんだ、さびしい秋祭りから、また、たいこの音の聞こえる、にぎやかなお祭りになったことを人々はよろこびました。

保存会の人たちは、夜おそくまで中心になってけいこをくりかえし、お祭りにそなえました。

「トンチキチ、トンチキチ」と公民館をけいこ場として、いさましいたいこの音がお祭りの近づいたことを知らせてくれました。

ところが、だんだん、たいこの打ち手がいなくなり、正しく打てる人が少なくなってきました。



ししだいこ

そこで、昭和58年ごろから、小学生に教え始めたのです。小さいころからたいこに親しませ、リズムをおぼえてもらい、やがてししまいを受けつぐ人になってもらおうとしました。子どものししまいもその時から始めました。



オヤジシ

ししまいは、三つの組み合わせでまわられます。まずはじめに、ホンカをまいます。これは、とても元気のよいまいで、おもてにあたります。次にまうのはオヤジシか、シシオコシです。オヤジシは、農業のしぐさをおもしろおかしくまうものです。ひょっとことおふくの面をつけた人がまうのです。

シシオコシは、^{かり}狩のこトです。りょうしが、しし狩に行き、山かげでひなたぼっこをしながらねむっている子じしを見つけ、起こしてひもでくくって帰ってくるというあらずじです。どちらもホンカとちがって、楽しいもので、見物人のわらいをさそいます。

終わりに、ハンカ、チドリ、スマシのどれかをまっておさめます。これがうらにあたるのです。ここではおめでたいサンバソウを入れることもあります。

ししまいは、まず神社でまいます。神様が今年のおいねのできぐあいを見に行かれる出発式のようなものでしょう。つぎに御旅所でまいます。ここでは、みこしにのった神様がひと休みなさるのです。

ししは、神様が通られる道々を先に先に行って、きよめておくのです。それから、組の^{つじ}辻でまった後、新しくたてた家や赤ちゃんが生まれた家々にまねかれてまいます。これらの家では、神様にこれから守っていただけることに感しゃして、お酒を出したり、子どもみこしのかつぎ手には、お菓子^{かし}をくばったりします。

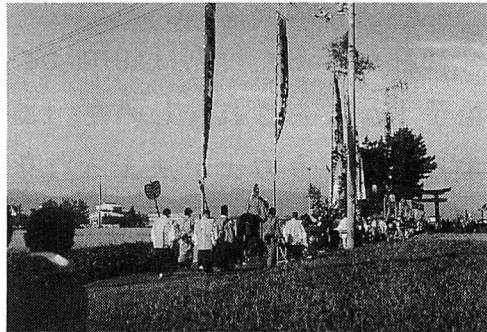
今年もししまいは、にぎやかにまわりました。長い年月、ずっと受けつがれているこのししまいは、村の人々の心をつなぎ、神様へのおいのりの気持ちを表したものです。いなほがたれ下がるころになると、遠くからひびいてくるたいこの音に心がおどります。重信町内では各地で^{かく}ししまいがまわられています。

おねり

うしぶち うきしま
牛淵の浮嶋神社の秋祭りは、古くから人々に受けつが
れてきた「おねり行事」があることで有名です。これは、
まつ
松山地方では他にれいのないめずらしいでんとう行事
です。



おねり



10月7日、朝早くいさましいたいこの音がなりひび
くと祭りが始まります。宮出しの儀式が行われ、みこ
しが宮出しされると、「おねり」が進められます。神社

から、西御旅所にしお たびしよ—巖島御旅所いつくしま—堀池御旅所ほりけまでのおよそ1kmを80人ばかりの小学生や大人おとなの人たちがいろいろな道具だいまようを持ってねり歩きます。それは、大名さんきんの参勤交代こうたいの行列こうたいににっています。行列のじゅんじょも進み方も決められています。

<行列のじゅんじょ>

1 手桶 <small>て おけ</small>	2 箒持 <small>ほうき</small>	3 神紋旗 <small>しんもんき</small>	4 お鷹 <small>たか</small>	5 餌刺 <small>え さし</small>	6 真 <small>ま</small>	
7 鉄砲 <small>てつぱう</small>	8 弓 <small>ゆみ</small>	9 矢 <small>や</small>	10 太刀 <small>たち</small>	11 猿 <small>ざる</small>	12 狐 <small>きつね</small>	13 子 <small>こ</small>
14 台傘 <small>だいがさ</small>	15 立傘 <small>たてがさ</small>	16 槍 <small>やり</small>	17 大鳥毛 <small>おおとりげ</small>	18 小鳥毛 <small>こ とりげ</small>		
19 長刀 <small>ながなた</small>	20 挟箱 <small>はさみばこ</small>	21 猿田彦 <small>ざるた ひこ</small>	22 御盾 <small>おんたて</small>	23 御弊持 <small>ご へい</small>	24	
25 宮総代 <small>みやそうだい</small>	26 笛 <small>ふえ</small>	27 太鼓 <small>たいこ</small>	28 拍子木 <small>ひょうしぎ</small>	29 行 <small>ぎよう</small>		
30 相撲力士 <small>すもうりきし</small>	31 振り奴 <small>ふ やつこ</small>	32 神職 <small>しんしよく</small>	33 神輿 <small>み こし</small>			

<おねりの進み方>

神社から出た行列は40mほど進むごとに止まります。拍子木やつこがならされ、「しめた。」という声がかかります。するとすもう力士が決まった身ぶりをして、8人の奴も二手に分かれて毛やりの投げわたしをします。それが終わると、またゆっくりと行列は進みます。

御旅所に着くと、みこしをすえておごそかに祭りのぎ式が行われます。4人の舞姫まいひめの「豊栄ほうえいの舞まい (おどめ舞)」、4人のすもう力士の土ひょう入りやまと ぼたらき (大和体操)、ししまいなどが見物する人の目を楽しませてくれます。



相撲力士



おどめ舞

〈おどめ舞をした子の話〉

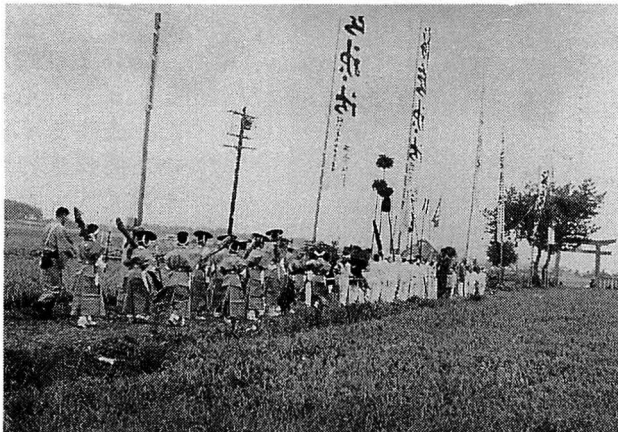
10月7日にそなえてなん日もれん習しました。去年までおどって^{おど}いた高校生のお姉さんも教えてくれました。牛淵の人が「おねり」を大切に思っていることがよくわかりました。見物の人の目がわたしに集まった時、気持ちがひきしまりました。来年もしっかりおどりたいです。

夕方からは、御旅所から神社へとひきかえす「ねりもどし」が行われて1日の「おねり行事」は終わります。

「おねり」が終わり、みこしの宮入りがすむと秋祭りも終わりです。すばらしい行事を見ようと遠くから来る人もいます。

「わたしが子どものころは、夜もつじつじにちょうちんがついたし、おねりの見物ももっと多かったんよ。晴れ着を着た子どもや大人も多^{おとな}かって、もっとにぎやかじゃったように思うよ。」

と、むかしをなつかしむ声も聞かれます。地いきの人は、すばらしい行事を大切に思い守りつづけようと努力しているのです。

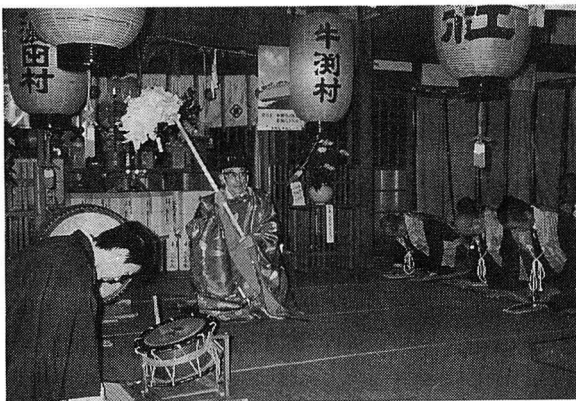


今から30年ほど前の行列

そ れい さい
祖 霊 祭

うしぶち うきしま 10月8日^{そ れいさい}に祖霊祭を行っています。祖霊祭^{そ せん}というのは、祖先の霊をお祭りすることです。前の日の7日には、秋のお祭りがあり、みこしが出たり、おねりの行事があったりしてにぎやかです。けれども、8日は、小祭りといって人々は、仕事を休みますが、7日のような行事はありません。

このお祭りは、^{かんぬし}神主さんと^{そうだい}総代さんと^{きぼう}希望者^{けいだい}とで行っています。境内には祖霊社^{やしる}という社があって、まい年お祭りをしているのです。この祖先のお祭りをするようになったのは、牛渕が村うつりをしたからです。



神様を祭る



そ れいしや
祖霊社

牛淵は、今の浮嶋神社の南の方にありました。今から300年ぐらい前に重信川のこう水のため田や畑が水につかったり、流されたりしました。そこで、1682年の12月に北の方の高い土地にうつりはじめました。それが終わるまでに155年かかり、1837年に、今の地にうつり終えたのです。

村うつりをする前に東西南北に道路をつけて、計画的にうつっていきました。そのため牛淵では、今もごぼんのめのように道路がついているのです。今の神社の南の方には「こやしき」という名前の田が、たくさんあります。これらの田は、むかし家のあったところです。

お寺も神社の南東の「きょうづか」というところにあっただそうです。それが、今のところにうつりました。浮嶋神社は、むかしのままでうつってはいません。この村うつりをした155年間は、「こやしき」には新しく家をたてて住むことはできませんでした。

ところが、^{どの}家でも、前の家にのこしてきた「屋しき神様」や「^{せんぞ}ご先祖様のおはか」の^{うじがみ}ことが気になりはじめました。人々は、そうだんをして、氏神様のけいだいにまどめてお祭りしようということになりました。このようにしてできたのが祖霊社で、そのお祭りが祖霊祭です。

こうち みしまこ
河内三島小まつり

下林の八幡はちまんに河内三島神社という社やしろがありました。かなり古くからあったと思われませんが、記録ろくはのこっていません。お宮の前の田の中に、とりいのあとがのこっていて、むかしの様子をしのぶことができるだけです。

お祭りの日は10月8日（三みなら奈良神社のお祭りのよく日）です。「小まつり」とよばれて、八幡組（やく40戸）だけのお祭りです。

小さな組ですが、おみこしをかついだり、ししまいをしたりします。

この日は、家々から米・もち・柿かき・みかん・やさいなどを持ちよります。自分の家で作ったものを持ってくるのです。持ちよったものを神様におそなえしておがみます。実りの秋に感しゃするお祭りです。

また、子どもの「夜ずもう」があつて、この小まつりは、よく知られています。

神社のけいだいに土ひょうを作り、ほかの地区くの子どももいっしょになって、すもうの取り組みが始まります。赤々ともえるたき火のもとで、夜おそくまです

もうの取り組みがつづきます。

このお祭りは、はでなどころはありませんが、地区の大人や子どもたちがみんな集まって来て、心を一つにしておまいりしています。

拝志はいし小学校の八幡組の子どもたちは、この「小まつり」をとても楽しみにしています。なかでも、ししまいに出る子どもたちは、秋祭りと「小まつり」(10月8日)と2回ししまいができるので、大よろこびです。夕方からのお祭りですが、れん習やじゅんびのために、急いで学校から帰っています。



田の中のとりいのあと



河内三島神社

亥の子

むかしのこよみで10月（今の11月ごろ）の亥の日に作物の神様が家へ帰ってきます。

そこで、よく帰ってこられましたねという気持ちから、いろいろなことをしていただきます。

11月の亥の日は、2回ある年と3回ある年があります。

2回ある年は、さいしょの亥の日を、そして、3回ある年は、さいしょと2番目の亥の日をいわうことが多いようです。

また、この行事は、その年のお米が、たくさんとれたことを神様にかんしゃする大切なおいわいでもあります。

上林地区^くでは、この日おもちをつく家がたくさんあります。

そして、夜は、子どもたちにとって楽しい「亥の子つき」があります。

むかしは、男の子がついていましたが、今では、女の子もいっしょになって行っています。

子どもたちは、わらをぼうのようにたばねた「わら

亥の子」をもって集まります。

みんなが集まると、家々をまわります。

「こんばんは。亥の子をつかしてください。」

と、言うど、その家の人だ、

「よう来てくれたなあ。さあ元気よくついてよ。」

と、言います。

そこで、子どもたちは、わら亥の子で地面をたたきながら、次の歌をうたい、その家のはんじょうをいわいます。

いのこいのこ

おいのこさんというひとは

いち一でたわらをふまえて

に二でにっこりわろうて

さん三でさけつくって

よつ四つよのなかよいよように

いつ五ついつものごとくなり

むつ六つむびょうそくさいに

なな七つなにごとないように

やつ八つやしきをたてひろげ

ここの九つこぐらをたてならべ

どう十でとうとうおさめた

このいえはんじょうせい

このいえはんじょうせい



いのこつき

亥の子をつき終わると、その家の人
が、「ようついてくれたなあ。ごくろうさん。」
と、言ってお菓子^{かし}やお金をくれます。

子どもたちは、ぜんぶの家が終わると、もらったお菓子やお金をみんなでわけます。

亥の子つきがすむと、わら亥の子を柿^{かき}の木の枝^{えだ}につるします。

こうしておくど、お米ややさいが、よくできるのだそうです。

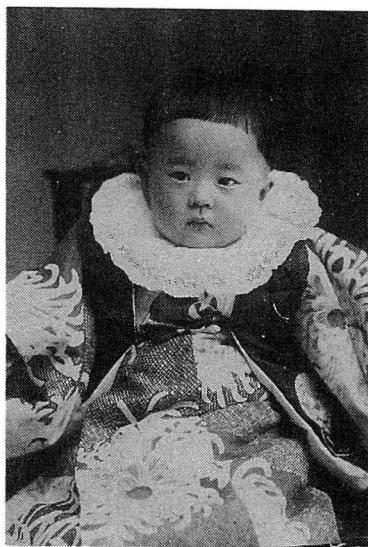
なお、この亥の子をつく地区は、重信町内にたくさんあります。

七 五 三

むかし「わたぎ」とか「ひもはなし」というおいわいの行事を、どの家庭でもしていました。

「わたぎ」というのは11月15日までに生まれた赤ちゃんを、「ひもはなし」というのは数え年3歳さいの子どもをおいわいする行事です。

わたぎは、わたの入った「ひとつ身」の着物を作って着せ、わが子が元気に育ったお礼に氏神様うじがみへおまいりしました。



わた着

また、むかしは、洋服などほとんどなくて、みんな着物を着ていましたので、「ひもはなし」という行事をしていました。ひもはなしというのは、ふだんは、「つけひも」といって、ひもを着物にじかにぬいつけて着せていました。この日は、「三つ身^み」の着物を着せ、つけひもの上にべつのおびをしめて着かざり氏神様へ元気に育ったお礼のおまいりに行きました。

むかしは、今とちがって赤ちゃんが死ぬことがたいへん多かったのです。それは、今のように医学も進んでなかったうえ、ミルクなども十分でなかったので、元気で満^{まん}3歳まで育つと親はたいへんうれしかったのです。



七五三

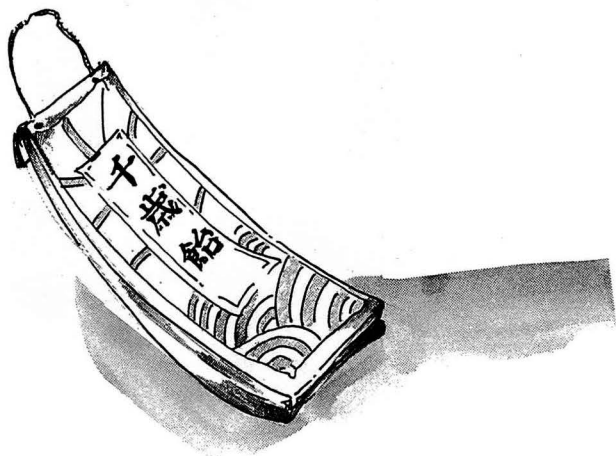
このようなうれしい親の気持ちを「わたぎ」や「ひもはなし」の行事として行うようになったのでしょうか。

この日は、母親の里やしんせきなどからおいわいの品がとどけられ、家ではごちそうを作り、酒もりをしてお客をもてなしました。

こうしたむかしの行事も、世の中が進むにつれてなくなり、それにかわって七五三の行事が行われるようになりました。

今は、3歳の男の子と女の子、5歳の男の子、7歳の女の子のいる家庭では、それらの子にきれいな洋服や着物を着せ、親につれられてお宮まいりする風けいが見られるようになっています。

七五三のおいわいのやりかたは、大都市などの人々が始めたもので、それが、だんだんにわたしたちの方へも広がってきたものだといわれています。



冬



ごめんさん

毎年12月20日、牛^{うし}渕^{ぶち}の浮^{うき}嶋^{しま}神社から野^の田^たの徳^{とく}威^い三^み嶋^{しま}宮^{みや}へ、または、徳^{とく}威^い三^み嶋^{しま}宮^{みや}から浮^{うき}嶋^{しま}神社へと1年ご^とに行^い列^{れつ}が^が出^で発^{はつ}し^ます。これ^は、大^お切^きな三^{さん}つ^つの御^ご面^{めん}を二^につ^つの神^{かみ}社^{しゃ}で^で受^うけ^けわ^わた^たし^しを^をす^する^るた^ため^めの^の行^い列^{れつ}で^です。「御^ご面^{めん}渡^とぎ^ぎよ^よさい^{さい}御^ご祭^{まつり}」と^とい^いう^う神^{かみ}事^じで^です^すが、地^ちい^いき^きの^の人^{ひと}々^々に^には「ご^ごめ^めん^んさん」と^とい^いっ^って^て親^おし^しま^まれ^れて^てい^いま^ます。



御面渡御祭

江戸時代、「御面は二つの神社が1年交たいでお祭り

しましう」とやくそくができました。それから 250 年間、「ごめんさん」はつづけられています。

三つの御面は、「おみたま箱」におさめられて、^{かんぬし}神主さんによって運ばれます。むかしから神社の^{そうだい}総代の方や^く両地区の区長さんもさん列していましたが、御面は地いきにとって大切なものであったにちがいありません。

では、この三つの御面についてお話ししましょう。

三つの御面は「雨ごいの神事」に古くからつかわれたものです。三つとも17から19cmほどの小さな面ですが、とても古いもので、ひとつは^{かまくら}鎌倉時代（800年ほど前）、あと二つは^{あづちももやま}安土桃山時代（450年ほど前）に作られたものと言われています。



三つの御面

「雨ごいの神事」は今はありませんが、昭和のはじめごろまでは行われていたそうです。

農村にとって、日でりが長くつづくということはたいへんなことでした。田にひつような水がなくなるからです。あちらこちらで水をめぐってあらそいが起こることもありました。村の代表者は何度も会を開いて、どうしたらよいかを考えました。いずみの底をもっと深くほったり、新しくいずみをほったりしました。それでも水が足りないというときには、さいごの方法^{ほう}として、御面を祭り「雨ごい」をしたのです。「雨ごいの神事」は村にとって大切な行事でしたから、どの家からもかならずひどりはさんかするきまりになっていました。

神社に集まった人たちは、おこもり^{でん}といって、社殿にとまりこんで雨がふるようにいのりました。神社の広場には、家々から持ちよっただいそく（まき）を山のようにつみあげて、それに火をつけ、消えないようにもやしつづけました。まい上がる火のこを見上げながら、雨のふるのをいのったのでした。

享保^{きょうほ}17年（1732）には、それまでにない大日でりになり、三つの御面をお祭りして、7日間も「雨ごい」が行われたそうです。このころから、御面を二つの神社で受けわたしをしてお祭りするようになったのです。

ふた いし だい し
二 つ 石 大 師



大 師 堂

南野田 129番地にあるこの二つの石大師には、次のようなお話がつたえられています。

むかし、この地に^{よこばりきゆううえもん}横張九右衛門というごうぞくが住んでおった。とてもよく深い人じゃった。ある日のこと旅のぼうさんが、一夜のやどをおねがいをしたそう。すると九右衛門は、
「このぼうずめ、さっさと立ちきれ。」

とおいかえしてしもうた。旅のぼうさんは、しずかなおももちで、その場を立ちさられた。ところが、ふしぎなことに、このぼうさんがさったあと、いずみのそばに、たいらな石が二つあらわれたそうな。

ところが、もっとふしぎなことに、この九右衛門のうちでは、子どもたちが、次々と死にたえてしもうた。まだまだこまったことが起こった。来る日も来る日も日でりつづきで水がかれ、田植えができず、人々はどほうにくれてしもうた。だれからともなく、

「あの旅のぼうさんは、^{こうぼうだいし}弘法大師さんだったにちがいない。知らないこととはいえ、とんでもないことをしてしまった。おわびのしるしに、お堂^{どう}をたててお祭りしよう。」

と、言いはじめ、^{だいし}大師堂ができたそうな。



二つ石

このお堂では、12月の寒いころに、子どもたちの、「大師より」がありました。これは、おこもりともよばれていました。6歳^{さい}から14歳くらいまでの男の子が手に手にムシロを持ってこの堂に集まってくるのです。このムシロをお堂のまわりにつるして、夜のつめたい風をふせぐくふうをします。お堂の中には、お母さんたちがおにぎり、お菓子、みかんなどたくさん用意してくれています。これを食べながら、きもだめしをしたり、かくしげいをしたり、大きくなってからのゆめを話しあったりしました。

子どもたちが、大師堂に集まるのは、弘法大師さんのようなりっぱな人になろうとする気持ちがあったからですが、せんそう後なくなってしまいました。



おいのりする人

でも、人々の心の中には、ずっとお大師さんをうや
まう心がのこっていました。そこで、2・3年前に新
しいお大師堂をたて、毎月20日に集まって、お念仏を
行っています。集まってくる人々も、南野田上組の人
たちばかりでなく、松山まつの方からも来ています。

このように、お大師堂で行うことも次々とかわって
きましたが、かわらないのは、人々の心です。今でも
朝にばんにこのお堂に来て、おいのりしている人を見
かけます。

お 日 ^ひ 待 ^ま ち

はいし く 拝志地区の「お日待ち」は、今は1月3日に行われています。

むかしは、それぞれの組で、じゅん番に宿元（集まる所）を決めました。その宿元（やどもと）に、組内の男の人が集まっておいのりをした後、おさけを飲んだりしながら夜明けを待ち、朝日をおがんで帰っていました。お日様の出るのを待つというので「お日待ち」の名ができたのでしょう。

「お日待ち」の方法は、組によってちがっていましたが、たいていのところでは、お金やお米を集めたりやさいなどを持ちよったりして行っていました。下林の助兼組（すけかね）では、米2合（およそ3.6dl）、とうふ1ちょう、大根1本を持ちよるように決められていました。

今もこのような集まりはありますが、とまったりすることはありません。組の役員さんを決めたり、組の1年間の計画を立てたりしています。組の男の人でも女の人でも集まって、お酒を飲んだり食事をしたりして新年えん会のようになっています。

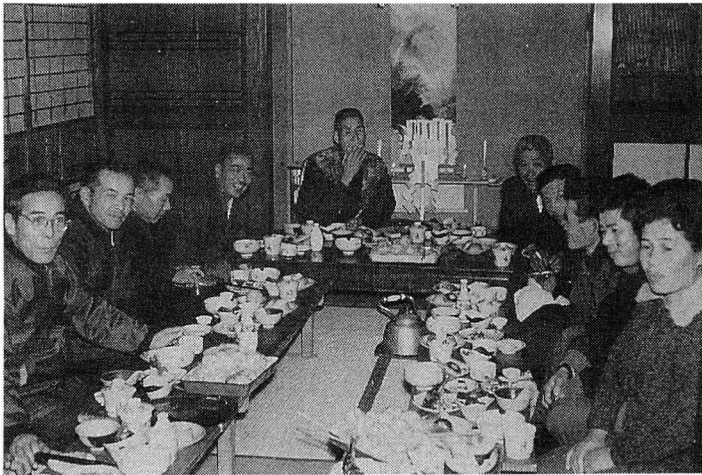
「お日待ち」がいつごろから始まったかは、はっき

りませんが、文化8年（1811年）に上村で「お日待ち」があったという記ろくがあります。これより前から「お日待ち」の行事はあったようです。

また、下林の伽藍^{がら}には、弘化^{こうか}3年（1846年）の日待帳がのこっているそうです。

この日に、お坊^{ぼう}さんにおがんでもらうところもあります。お米がたくさんとれますようにとか、1年間元気にすごせますようにと、おいのりをします。

「お日待ち」は、正月・5月・9月と年3回ありますが、正月だけ行うようになり、だんだんかんたんになっていっています。



お日待ち

正月七日の行事

(1) なずな^{せつく}節句

正月七日は、なずな節句といわれます。この日は
七草^{ななくさ}がゆをたいていただきます。このならわしは、
平安時代^{へいあん}（1000年ほど前）からありました。が、今
は、あまり行われなくなりました。

七草がゆとは「春の七草」を入れてたいたおかゆ
のことです。七草とは、せり・なずな・ごぎょう・
はこべら・ほどけのぎ・すずな・すずしろのこと
です。

七草がゆは、それぞれ家庭でつくられていました。
つんできた七草を「なずな七草石かちかち」ととな
えながらきざんだそうです。

唐土^{とうど}の鳥が、日本の土地へわたらぬさきにお節句
をいわったのです。

江戸時代^{えど}（350年ほど前）には五節句の一つに入
れられていて、七草のぞうすいをいただいたといわ
れます。これは年のはじめにあたり、今年1年、病
気にならないで元気にすごせますようにというねが

こめて節句をいわったのです。今は、七草がゆのかわりにりょうりをとって年のはじめをいわうようになりました。



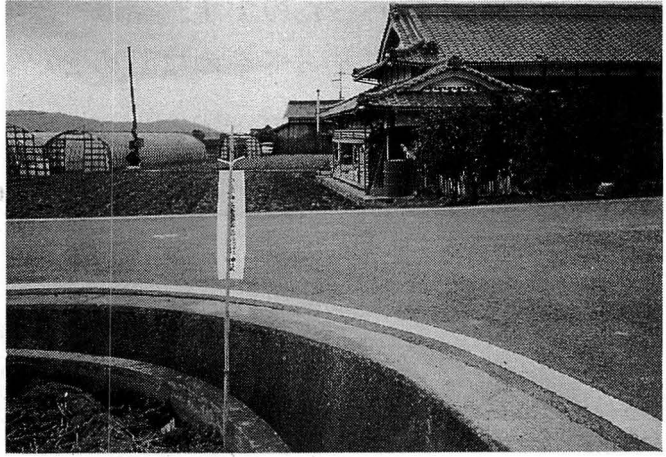
年のはじめのあつまり

(2) 町ぎとう^{ちょう}

七日節句には町ぎとうをしていました。今はあまり行われていません。町ぎとうというのは、^{うじがみ}氏神様よりいただいたおふだを村のまわりの^{つじ}辻に立て悪者をおい出したり、入ってこないようにおいのりをしたり、年のはじめに人々の幸せをおいのりする行事です。

^{たのくぼ}田窪では組ぎとうといって正月三日に、今でも行っています。そして村の^{つじ}辻に「せきふだ」を立てています。

町ぎとう



(3) なずな湯

正月七日の夜は、なずなをつんできて、なずな湯に入ります。これは、かぜをひかないようにと、また、病気にかからないで、元気にくませますようにとねがいをこめて始まったむかしからのならわしです。

このように七草がゆをいただき、町ぎとうをして村から悪まをおいはらい、夕方にはなずな湯に入って今年1年の健康けんこうと安全をねがいます。年のはじめの心あたたまる行事です。今は、そのなごりがのこっているていどで、ほとんど行われなくなりました。

ねん ぶつ こう
念 仏 講

念仏講をしているところが今もあります。あるとなり組では1年に3回行っています。1月16日は口明^{くちあ}け念仏、3月21日は彼岸^{ひがん}念仏、8月16日は盆^{ぼん}念仏といひます。お念仏講には、どの家からも二人ずつさんかします。

これは15^こ戸の組内をじゅん番にまわして、当番で行います。この当番を「こうもと」といひます。「こうもと」にあたる^{ほとけ}と仏様をお祭りして組の人々をまねいてお念仏をとなえます。

祭だん



この念仏は、仏様をおなぐさめするとともに組中の
人々が幸せにくらせますようにとおいのりをするので
す。

念 仏



念仏が終わると、^{せけんばなし}世間話をしながらおそなえものを
いただきます。農作業のことやいろいろな話が出て楽
しいひとときをすごします。

このようにして人々の心のふれ合いが行われ、あたたかい組づくりができるのです。

せつ ぶん 節 分

「節分」というのは、^き季節のかわり目のことを言います。だから、春・夏・秋・冬の季節の分かれ目で、年に4回あることになります。近ごろは、冬から春へのかわり目である立春の前日のことを言うようになりました。

今から1200年ほど前に、おとなりの国の中国から、つたわってきた行事です。

「節分」の前日には、おにぐいにいわしの頭をつけて、家の出入口におきます。これは、みんなおにのこわがるもので「おにをおいはらう。」と、いう意味があるそうです。

豆は、^{まめ}豆しばをたき、パチパチと音を立てていります。豆をいるときのこうばしいにおいは、春のおとずれを感じさせてくれて、とてもいいものです。

むかしは、豆をいりながら、その年のお米のでき具合をうらなったようです。じょうずに豆がいたら、お米もよくできるとよろこんだのでしょう。

いった豆は、ますに入れて神様にそなえます。そして、夕方になると豆まきを始めます。元気のよい声で



おにぐいいわしの頭をつけたもの

「おには外・ふくは内」と、家の外や内へまきちらします。

のこった豆は、あとで自分の年の数だけ食べます。
厄年やくどし（女33歳さい，男42歳など）の人は、自分の年の数だけの豆とお金を紙につつま、だれにも見られないように、こっそりと近くの四つ辻つじに落として帰り、厄落やくとしをしました。

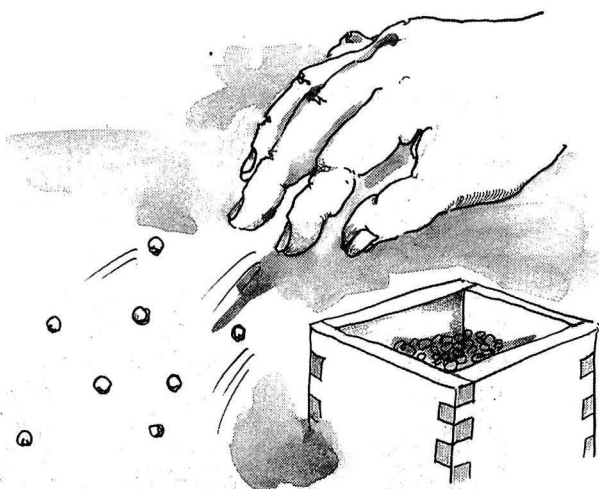
渡辺わたなべのみょう字のついている家は、まめまきをしなくてもよいと言われています。それは、むかし渡辺綱わたなべのつなという人が、おにたいじをしたといういいつたえがあるからです。おにはおそれて渡辺の家へは、入って来

ないのだそうです。

また、八木のみよう字のついている家も、豆まきをしなくてもよいといわれています。それは、渡辺綱が
おにたいじをしたときに使った弓矢ゆみやの矢が、八木家の
家紋かもんになっているからです。だから、おにはおそれて
八木家にも入らないのだそうです。

今も、「節分」の日の豆まきの行事は、引きつがれて
います。学校でも「節分」の日には、「豆まき集会」「節
分集会」などを行うことがあります。この日は、給食きゆう
に、いり豆がつくことは、みなさんもよく知っていま
すね。

松山市まつの石手寺いしての「節分」の豆まきは、よく知られ
ています。



ますに入れた豆

かい うん さい
開 運 祭

開運祭は牛^{うし}渚^{ぶち}の浮^{うき}嶋^{しま}神社で、今では2月11日に行われます。このお祭りは、みんなが、病気やさいなんにあわないようにとねがって行われるものです。

また、しけんなどに合かくしますように、病気がなおりますように、家がさかえますように、それぞれにお願いします。そして、おふだやお守りをいただきます。

はじめに14^{さい}歳の中学2年生の少年式があり、神様をお祭りして、元気で大きくなりますようにとお願いします。その後でお神楽^{かぐら}のほうのうがあります。

神 楽



人気のあるのがもちまきです。それは、2回（12時と15時）行われます。おもちの中には、くじが入っていて、ポリバケツ・ほうき・ちり取り・ちり紙などがあたります。それが楽しみで人々は集まってきます。

午後は、げいのう大会があります。しぎん・カラオケ・おどりなどたくさんのおしものがあります。そのほか、地いきの方々のお世話で、うどんコーナーやわたがしを売る店があって1日中にぎわいます。

どの家庭でも、きょうのできごとを語り合って、楽しい1日を終わります。



もちまき

伊 予 万 歳

伊予万歳は、いつどこからつたわってきたのかは、
はっきりしませんが、^{しよだいまつやまはんしゆまつだいらさだゆき}初代松山藩主松平定行の時代に
^{かみがた}上方（今の^{おおさか}大阪・^{きやうと}京都方面）にあった^{みかわ}三河万歳をよん
でお正月に歌いおどらせたのがはじまりといわれています。

^く上林地区でさかんになったのは、^{しやうわ}昭和21年に^{むらかみぎ}村上儀
^{いち}一という人が、教えてからだといわれています。

村上さんは、^{ほうじやうし}万歳のさかんな北条市生まれの人なので、^{わか}若いころから自分でも歌いおどっていたのだと思います。

上林地区の伊予万歳は、はじめは、新しく家をたてたときや^{けつこんしき}結婚式のお祝いなどにおどっていました。

しかし、年がたつにつれて^{だいし}お大師さんのお祭りやお月見などにもおどられるようになりました。

ところが、世の中がすすみ、人々の楽しみが、^{えい}映画やテレビにかわってくると、だんだんおどることが少なくなりました。そして、おどりを知っている人もいなくなってきました。

これではいけないということで、昭和50年ごろ、伊

予万歳^{ほ ぞん}保存会がつくられ、村上さんたちが中心となり、人々に教えるようになりました。

特に、小さい子どもに教えることが大切ということで、^{とく}保育所^{ほ いく}の子どもや小学生たちにも教えるようになりました。



おとな
大人の伊予漫才

今、子どもたちがおどっている伊予万歳には、「名所^{ほうねん}づくし・豊年^{せんぼん}おどり・千本^{まつ}ぎくら・松^{みぞのべそう}づくし・溝^{どう}辺^{どう}騒^{どう}動^{どう}・ぜに^{どう}だいこ」などがあります。

とくに、名所づくしの中には「上林名所づくし」というのがあり、上林地区の地名や名所がうたわれており、上林地区のことがよくわかります。

そして、敬老会^{けいろうかい}や上林^{みん}公民館祭、上林^{げい}小学校の学芸

会などでおどっています。



子どもの伊予万歳

上林地区の子どもたちは、せっかく今までおどってきたのだから、これからもみんなでおどり守っていかねばならないと思っています。

なお、近ごろは、重信町内のいろいろな地区でもおどられるようになってきました。

い よ か ぐら
伊 予 神 楽

重信町でも行われている伊予神楽は、^{さとか ぐら}里神楽ともい
われています。^{かたやま}下林の^{うしぶち}片山神社、^{うきしま}牛湊の^{うきしま}浮嶋神社、^{しろやまてんまんぐう}上
林の^{かく}城山天満宮など各地でうけつがれています。

神楽は、神様をおなぐさめするためにまうのです。
牛湊の浮嶋神社では、1年に3回まいます。神楽は12
^{てん}天あります。

(1) ^{まいの ぐち}舞之口

日本の70の神様をお祭りし、おへいをもってま
います。

(2) ^{ちごか ぐら}稚神楽

^{さい}5歳から12歳の子どもたちがまいます。

(3) ^{た ぐさ}手草

^{し ぜん}自然や神様のありがたさに感しゃしてまいます。



手草まいの舞

(4) かみむか 神迎え

神様をおむかえするまいのこトです。

(5) してん 四天

4人のすぐれた人が日本の国を平和にしたよろこびをまいます。

(6) だいば 大魔

神様にわるいことをする大魔の心をあらためさすためのまいです。

(7) ぼんの まい 盆之舞

お盆をもってまいます。

- (8) ^{きがえし}鬼^{ゆみ}帰
弓をもって、悪いおにをかえすまいです。

- (9) ^{やまの おう}山之翁
^{じんぐうこうごう}神功皇后様の道あんないをしたおじいさんのまい
です。

- (10) ^{なぎなた}長刀
神様からいただいたなぎなたを持ってまいります。

- (11) ^{さんめん}三面
^{か しまみようじん か とりみようじん}神功皇后様と鹿島明神、香取明神の3人で、さん
かんせいばつに勝ったよろこびのまいです。

三面の舞



- (12) ^{あまのいわとの まい}天岩戸之舞
天の岩戸の前でまいります。

米づくりと年中行事

わたしたちの食べている米のれきしは古く、また米づくりにはたいへんな苦^{ろう}勞がありました。むかしの人^{ほう}は豊作を神にいのり、お祭りをして感^{しゃ}しゃしました。そのために、いろいろな行事が行われました。しかし、今の米づくりは、むかしとちがってきかいを使ったり、薬やひりょうもできて、あまり苦勞がなくなりました。それでむかしあったおいのりや感^{しゃ}しゃの行事もだんだんなくなってきました。そこで米づくりの年中行事についてのお話をしましょう。

^{くわ}鋤ぞめ（1月2日）

農家の道具のたいせつなものに鋤があります。米づくりや農作業には、この鋤はなくてはならないものです。

1月2日の朝早く、家の近くの田か、^{なわしろ}苗代をつくる田を鋤で少したがやしました。そして、田の^{みなくち}水口（田に水を入れるところ）に^{まつ}松の^{えだ}枝や^{さき}さき、^{さおとめ}早乙女さんとよぶ半紙をはさんだ^{がき}竹を立てて、ほし柿・みかん・お

米・たつくりをそなえました。「今年もどうか豊作でありますように、また農作業がぶじにできますように」と、土地の神様においのりしました。これを鍬ぞめといいいます。

田おこし（4月終わってから5月はじめ）

田に一面のれんげの花がきき終わるころ、田のひりょうにするために、このれんげを田にすきこみました。今から30年ほど前までは、牛が鋤^{すき}をひいて、田の土をほりおこしていました。それでたがやすことを「鋤^すく」といっていました。

鋤くときに、農家の人が一番苦勞したのは、牛が鋤く人のいうことをきいてくれないときでした。

今はトラクターで、かんたん^んに深くたがやすことができ、農家の人はいへん楽になりました。

苗代^{なわしろ}（4月終わってから5月はじめ）

苗代は水がかりがよく、見まわりにべりな田に今もむかしもつくりますが、今は田植えきで田植えをするため、むかしの苗代とはちがっています。

むかしの苗代は、わたみかす（わたの実のから）、はい、米ぬかをまぜたひりょうを田にまき、3・4尺

(0.9mから1.2m)のはばで、長方形に土をもりあげてつくります。

そして、農家が大切にしまっていた種^{たね}もみを苗代にまきます。もみはまく前に水につけます。(3日から5日)次に、しずんだもみをえらんで、布袋^{ぬのぶくろ}に入れて消どくをし、川や池につけて、めが出やすいようにしました。このことをむかしの人は、「桶^{おけ}がし五日、かます(わらであんだふくろ)がし三日」といっていました。

田植えの日(夏至の日)から、ぎやくに数えて40日から45日前に苗代にもみをまきました。



むかしの苗代

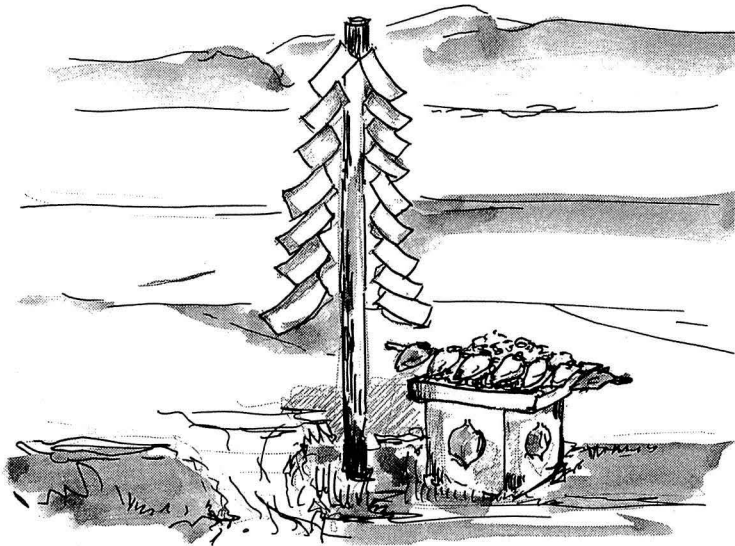


今の苗代

もみまきいわい（5月はじめ）

もみまきがすむと苗代の水口にかざりつけをして、お正月に祭ったお米やほし柿、たつくりなどをそなえて、めがよくでますようにとおいのりしました。

もみまきをした夜は、せっかくまいたもみのめが出ますように、またひとところにもみが集まったりしませんようにとねがっていました。



田植えのじゅんぴ（5月終わりから6月はじめ）

もみまきがすみ、やがていねの苗^{なえ}が成長するころになると、川の水の流れをよくするために、地区の人みんなで道路や川のそうじをします。それぞれの家でもあぜの草をかり、田植えのじゅんぴをします。

また、それぞれの地区では係の人（協議委員^{きようぎい いん}）が、田に水をひく日を決め、上流のほうから田に水を入れていきます。

農家の人には田に水が入ると、水がもらないようにあぜをぬりかためます。

田植え（6月中ごろから7月はじめ）

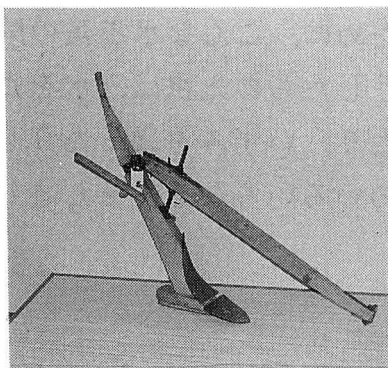
6月は農家にとって、麦のとり入れや田植えて、一番いそがしいときです。

今の田植えては、ほとんどきかいで植えていますが、むかしは人の手で植えていたので、家の人みんながするたいへんな仕事でした。朝早くから、牛を使ってうねかきやしろかきをして、土地をたいらにします。

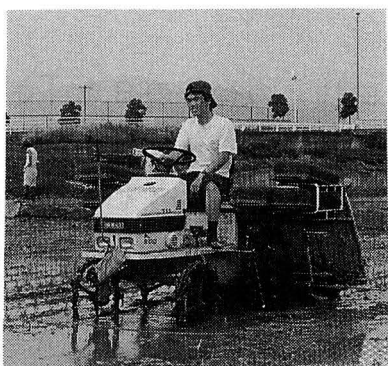
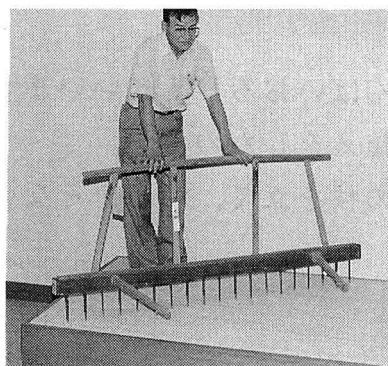
子どもは苗代から苗をはこぶ手つだいなどをしました。子どもたちも農作業を手つだうため、学校は休み^{のうはんきゆうぎよう}（農繁休業）になりました。となりどうしで手つだっ

たり、特別に人（早乙女）をやとって田植えをする農家もありました。

むかしの田植道具



今のきかい



田植えのときは、水がたくさんひつようです。日でりがつづいて水不足ぶそくのときは、山之内やまのうちの麓地区ふもとや高い山でおいのりをしたり、おどりをおどったり、火をたいたりして、雨ごいをしました。

このような日でりつづきの年は地区の人みんなで、押し田おしだという方法ほうで田植えをしました。押し田おしだというのは、上の田から下の田へじゅん番に水を落としながら植えていく方法で「水押しみずおし」ともいわれ、地区の人全員で力

をあわせてする田植えとして、むかしからのならわしになっていました。

今は^{おもご}面河ダムの水があるために、こんな水不足の問題は起こっていません。わたしたちの先祖は、^{せんぞ}水をためておくために池をつくったり、いずみをほったりして、水不足をなくするためのいろいろな^と努力をしました。

さんばいおろし

田植えの初めの日を「さんばいおろし」といいました。神様をむかえてから田植えをしたのです。

田のあぜにささやつばきの枝を立て、^{やきごめ}焼米をそなえて豊作をいのりました。

さなぼり（田休み）

苗代にしていた田の植えつけをさい後に、田植えが終わります。この日をさなぼりといいました。

すべての地区の田植えがすむと、一日、田休みをとり、どの農家でも農作業を休み、あずきごはんやかしわもちをつくっておいわいをしました。

田の草とり

米づくりの作業の中でもっともたいへんな仕事が、この草とりです。夏の日ざしの強いとき、こしをかかめてする仕事です。この仕事をながくつづけていると、こしをのばすことができなくなります。むかしの年よりにこしがまがった人が多かったのは、このような農作業が多かったからかも知れません。

7月から8月にかけて、5・6回もの作業をしなければならなかったのです。今は、除草剤（じよそうざい草をからす薬）ができたので、こんな苦勞をしなくてもよいようになりました。

虫送り（7月終わり）

米づくりのたいてきは、いねの病氣やがい虫です。むかしの人は、いねが虫に食べられないようにむしぎ とう虫祈禱というおいのりを行いました。

そして、お寺で作ってもらったはたを先頭にして、大きなたいこをたたきながら、地区のさかいまで虫を送っていき、そこにせきふだ関札というお札をたてて、家に帰っていきました。

秋まつり

台風シーズンを何事もなく終え、いねのほも黄色く色づきかけると秋祭りです。

むかしは、^{なかどお}中通り祭りといって、10月14日から16日ころに行われていました。秋のしゅうかくをよろこび、^{うじがみ}氏神様をお祭りする日です。

朝早くから神社のたいこがなり、みこしをかついで地区をまわります。むかしは、^{しっかわ ひのくち}志津川と樋口地区では国道(^{きたよし}北吉井小学校の西がわ)でみこしのけんかをしていました。今ほど自動車の数も多くなく、バスか木ぎいをつんだトラックが通るくらいでしたので、こんなこともできたのです。



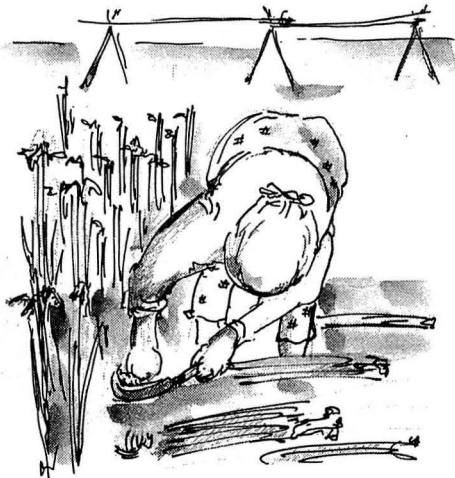
みこしのかきくらべ

今はそれぞれの地区でみこしをかき、ししまいを小・中学生や青年だんの人がいっしょになってまっています。ししまいの中には、ししが農作物をあらす場面やししをたいじする場面があります。このように、豊作を神様に感しゃする一日なのです。

いねかり (10月中ごろから11月はじめ)

いなほが黄色く実ってくるといねかりです。今はきかいでかり取り、だっこくしてしまいます。

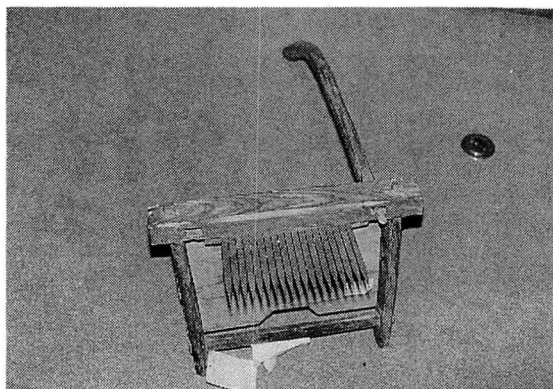
むかしは一株一株、^{かぶ}鎌でかかっていました。そして、持ちはこびや、いなきにかけてかんそうさせるのにべんりなようにまとめておきました。



だっこく（10月中ごろから11月中ごろ）

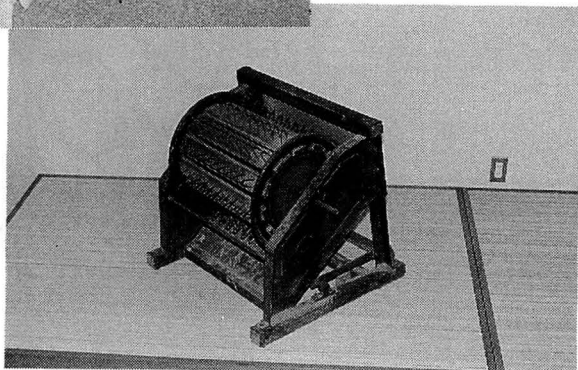
かんそうさせたいねをいよいよだっこくする作業です。むかしは「千齒^{せんば}こぎ」を使っていましたが、「足踏^{あしふ}みだっこくき」ができ、だっこくの仕事も早くできるようになりました。ところが、これもなかなかたいへんな仕事だったのです。

40年ほど前から「動力だっこくき」を使い始め、たいへん早く楽に作業ができるようになりました。



千齒こぎ

足踏みだっこくき



もみすり（11月中ごろから12月はじめ）

田でだっこくしたもみは家に運ばれ、庭でむしろに広げてかわかし、いよいよもみすりです。この作業は米づくりのさい後の仕事です。豊作の年は、みんなにこにこした顔で作業がつづきますが、不作の年はみんなの顔もくもります。

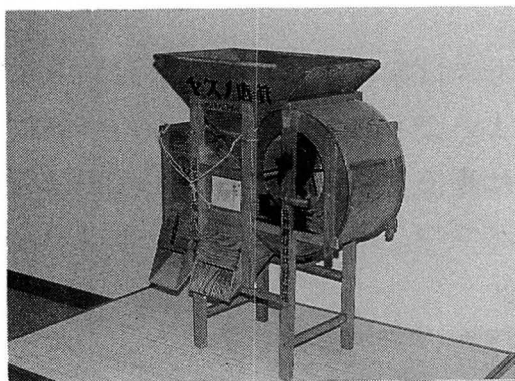
むかしのもみすりはたいへん苦勞しました。「やれ木うす」という大きなうすを4・5人がかりでまわし、もみがらをのけるので、となり近所が助けあいました。次にそれを^{とうみ}唐箕を使ってもみがらやちりをふきとばし、さい後に^{まんごく}万石でお米とのこっているもみとに分けました。

今は、もみすりきでするので、自動的^{てき}にもみがらとお米とにより分けられ、もみすりきの受け口からきれいなお米が出てきて、ふくろにつめられています。

もみすりいわい

もみすりが終わると、もみすりいわいをしました。もみすり^{しよ}で、さいしよにできたお米を一升ますにとつて、まず神だなにそなえます。もみすりが全部終わると、^{とうみよう}灯明やお神酒^{みき}をそなえて、もみすりいわいをしま

した。近所の手つだってもらった人々をよび、ごちそうをして、いっしょに豊作をいわいました。



唐 箕

万 石

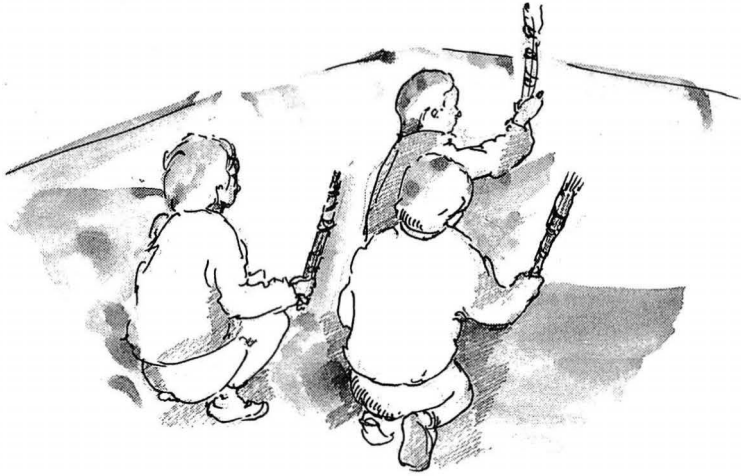


^い亥の子 (11月から12月)

むかしのこよみで10月の亥の日に、ことしとれたお米でおもちをつき、ゆず・大根などとともに祭りました。おもちをつくときには、うすの四方に新わらをおいてつきました。

この日には、子どもたちによる亥の子つきがあります。自分の家のわらで亥の子を作って集まり、家々を

まわって、亥の子の歌をうたっておいわいします。その家からは、もち・みかんやおしゅうぎのお金などをいただきました。



これまで、むかしの米づくりについて調べてきました。農家の人々は豊作を神にいのり、自然しぜんのめぐみをねがいながら、このような米づくりをしてきたのです。わたしたちは、祖先のいろいろな苦勞を知り、これからのくらしに役立てたいものです。

お わ り に

- ◇ 郷土にはぐくまれ、保存されている文化遺産を、郷土教育資料として集録し、残しておこうという試みは、昭和41年から、教育委員会によって進められてきました。

既に「しげのぶ」「ふるさとこみちしげのぶ」「重信のむかし話」「重信の子供の遊び」が発行されています。
- ◇ 昭和62年、63年度は、重信町内の年中行事を取り上げ、集録・発刊することになりました。

現在も盛んに行われているもの、あまり盛んではないが、地域的に、また、部分的に残っているもの、現在は、ほとんど忘れさられているが、昔行われていた価値ある行事などの中から、38の行事を集録しました。
- ◇ 年中行事は、もともと、宮中などで行われていた公の行事を指していましたが、後には、民間行事や、祭礼などもこの中に入れるようになりました。これらの行事によって、家族の結びつきをより深めたり、生活に節目をつけることによって、明日への活力をたくわえたりしたのでしょう。

また、地域共同体としての連帯を強めたり、素朴な信仰を通して精神的な安定を得たりしたことでしょう。

このように、年中行事は、人間として、より豊かに生きるため、また、よりよい社会を作っていくための一つの手だてであるとも考えられます。
- ◇ 重信町の子供たちが、この「重信の年中行事」に親しむことによって、古きよき伝統行事を身をもって受け継ぎ、さらに発展させてくれることを期待しています。また、郷土を愛する心情を深め、心豊かな人間として育つことを願ってやみません。
- ◇ この「重信の年中行事」は、集録もれや、内容・体裁に不手際も多いかと思いますが、これを読まれる大人の方々によって補完していただければありがたいと存じます。
- ◇ 最後に、集録・編集に御協力くださった多くの方々にお礼を申し上げます。

編 集 委 員 会

編集・協力者一覧

○編集委員

北吉井小学校

高橋謙一 青野隆夫 藤井紀子

南吉井小学校

八木光秋 清水 透 菅野茂美 大塚宏香

拝志小学校

水田敏廣 高橋久枝

上林小学校

土居茂男 吉田 修 山内志津江

重信中学校

八石武雄 窪田征洋 田中康雄 高須賀康夫

堀内秀樹

○絵を書いた人

南吉井小学校 清水 透

重信中学校 徳本 浩

○協力した人

重信町教育委員会

伊藤 博 和田久弘 野中 忍

重信町内の方々

重信の年中行事

昭和六十三年十一月三日 印刷発行

編集者 重信の年中行事
編集委員会

発行者 重信町教育委員会

温泉郡重信町大字志津川九七二
電話〇八九一六―一五〇

印刷所 有限会社 青葉書

松山市小栗六丁目三―二二三
電話〇八九一六―二二五